金毘羅參詣名所圖會

四

金毘羅參詣名所圖會卷之四

目錄

掠本漁村の圖　江浦山　圓柏岩窟　鳩の岩窟
行人の岩窟　行道場恐草石　古城の趾　扶又峠
仁保の浦　加茂の神社　天神島　鷲巣山
鶴嶋　亀嶋　平石遊覧の圖　大俎石　小俎石　高麗狗石
瓶石　蟇石　二見の岩家石　烏帽子石　帆解崎
長磯　寺浦　挑の隈　仁保山妙見社　箱の岬
大濱　積ノ浦　生利の濱花御前　舩越八幡宮　香田の浦
尊澄親王而跡の圖　濤打八幡宮　託磨牧　鯛鰆の漁場
鰆網の圖　浮島神社　辛嶋辨天祠　釜島獅々嶋

見立峠
迦毘羅衛院奥院
子育観音
十四橋
道隆之塔
光明菴
頼之軍勢指揮の圖
亀石権現の社
道範寓居の古趾
加持水　揺岩
飯の山権現の社
白河原風ゲ浦
浴巾掛松の古木
大師産盥
弄度津の湊
鴨の神社
榜握清水
同掛引松
鶏足津
聖通寺
聖通寺山の古城
光顕寺強力の圖
迦毘羅津の濱
雨乞地蔵
海岸寺
道隆寺
忍ゲ岡
法然上人奇特の圖
青の山
鶏足津の古城
野澤の水
川津の梅の圖
坂出の濱
伐石
産湯の水
熊手八幡宮
鎮守妙見祠
塩屋の天神
田潮八幡宮
小烏明神社
道場寺
巖の薬師
飯の山
飯の神社

魚の御堂
水源薬師堂
崇徳天皇社
永聞持石
閼伽井
八十八の水
金山権現祠
四脚の鳥居
白峯の古城
底無川
地蔵堂
横塩の神社
福江大師堂
三十二騎討死の趾
五夜ゲ嶽
悪魚退治の圖
妙成就寺
遍照院
清氏討死の圖
雲井御所の四趾

掠本浦里

掠の本と云ふ江浦山の麓の海辺に漁夫の家多し江浦山の海崖を巡覽すんと欲す

漁船とかゝ行べし

寄景の岩窟を多し

月舟
行場

江浦山
圓拍窟
鴆之窟
行人之窟
鴆ノ窟
行人窟

江浦山　掠本村ふあり有明の漢より磯づたひ行程僅ふして至る襟の掠本の漁家多し

圓柏窟　海面の岸ふ下り巖の岨より圓柏あまた生出る繁茂の下ハ岩窟ふして石壁滑なる此のみなり此寺石怪岩ばかりなり多し

鳩之窟　同岩窟ふして妙あまた巣をつくる此ニ栖める土人婚部屋とす

行人之窟　行者らふ来つて修行をする事時々ありなり實ふ世塵をそしりたる波濤の音松のかぜ千鳥鶴のこゑのみの外耳ニ触るものなき出地なり

行道場　右ニ同じ此藏不動役行者ふの石像を置

忍草石　山上ニあり石中ニ忍草の紋あり出ずと雖ども紋あらざるもの屋号なり雲根志曰美濃国養老の山中ニ忍草石あり云れとも忍草の葉の形ありて最鮮なりこの所のたぐひなり

古城之趾　同山上ニあり細川何某の竜ふとして其支跡未詳拾遺追考の部ニ委ず

狭父峠　山上ニ石の地蔵あり七月廿四日遠近より群来る上下十八丁の峠なり

仁保ノ浦　仁保村の渓ニ此浦里千軒許り在家にして農工商ふも多し漁家垣竈ふあり尤ハ舟便宜の湊ふして繁昌せり

賀茂神社　仁保村ニあり生土神ふして則ち鴨皇を神宮と称る例なり九月十四日神輿渡御あり舟祭の類ひ多きもまた芝居ニもおよばず大ニ繁

天神島　仁保の濱の向ふニあり菅公勅諚の社あり濱辺より二丁斗隔つ

鷹巣山庄内島　もふ仁保の濱の右の方ニ命ニ島より

鶴島　仁保の正面にあり

平石　鶴島の左ニある島なり鶴島より二丁斗隔つ

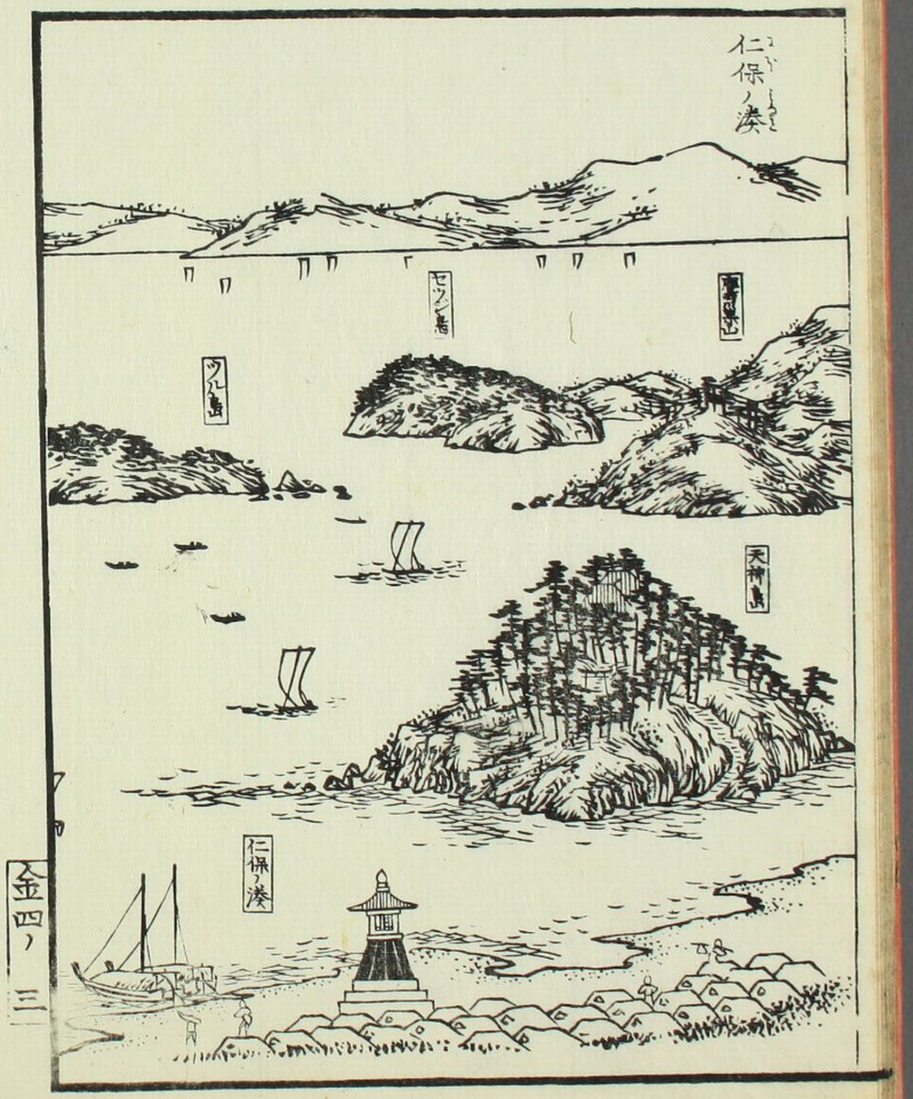
亀島　俗ニ大ぶとしと称す亀島の傍海中ニあり石の面ふ亀ニ似たり故ニ名とす

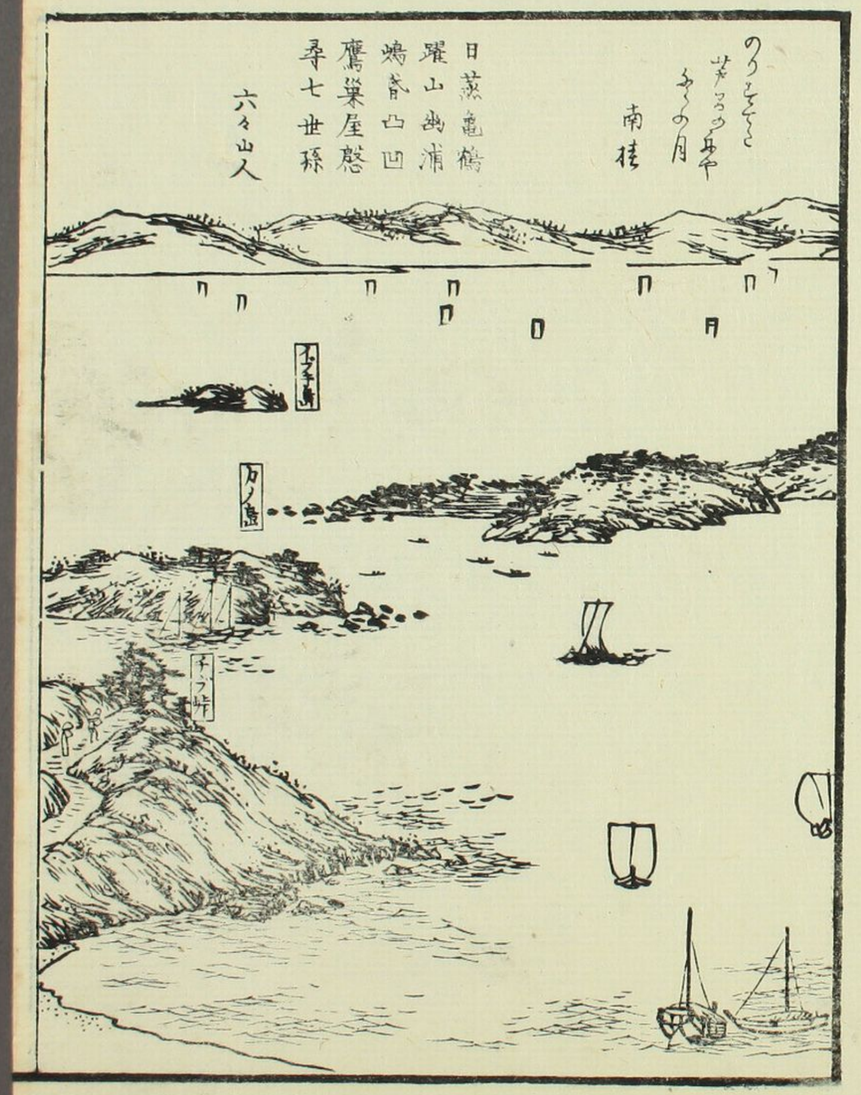
大俎石小俎石　平石ニ列る貴人ニ捧ぜ給ふ時ハ此石を庖丁の徒料理の場所ニ用ふ

高麗犬石　霍島の際ニあり其形狛犬の如き大石なり

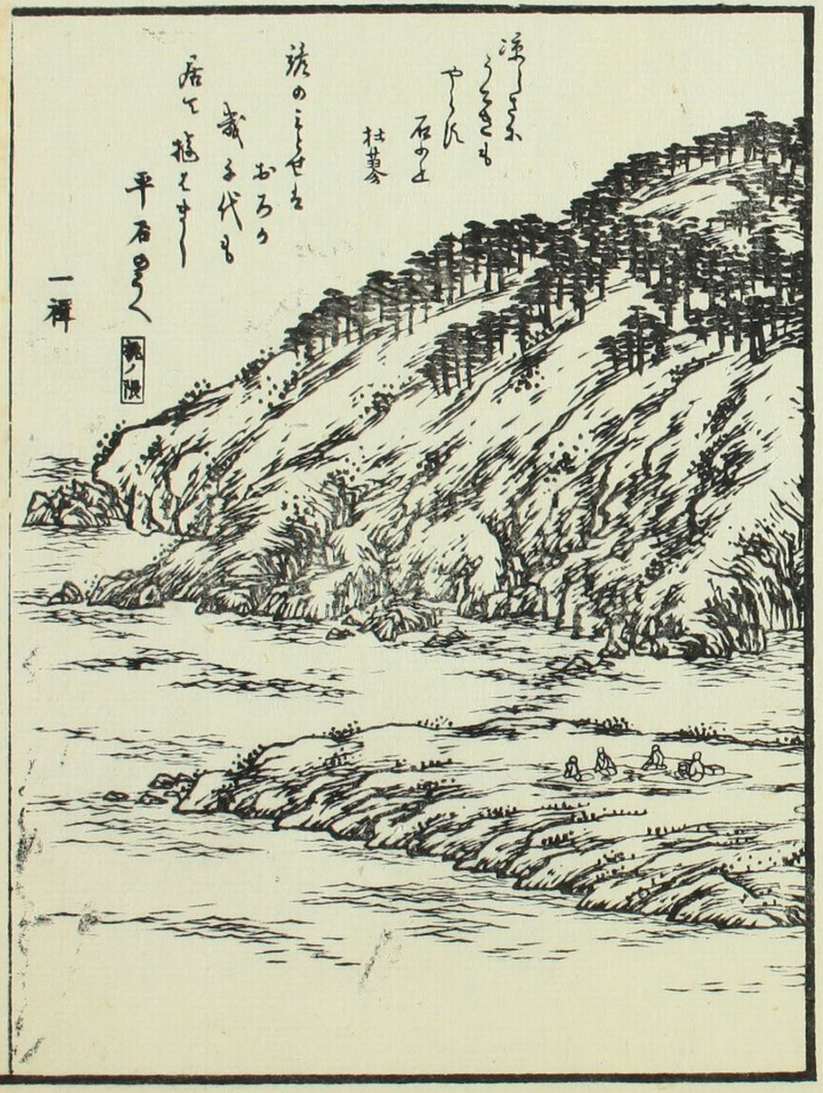
瓶石　墓石二見岩　家石　烏帽子石　霍島の廻りにありのつれも其形れ彷彿

帆解寄　長磯　寺浦　挑之隈　霍島の名所にして景地なりおよそ霍島仁保の渓より海上三十丁ばかり海一雑色ふして人家づくり二軒あり耕作を事とし漁を他所ニ求ふ此浦ニ漁ることを平生にあり竈島ハ人家なくとも干潮ニハ歩行して渡る也ニ海水ニ入る


仁保ノ湊
ツル島
天神島
仁保ノ湊


のろまつの月
南桂
日蒸亀鶴
躍山幽浦
鳴音凹凹
鷹巣屋愨
尋七世孫
六々山人
カノ島

仁保ノ平石
大俎石
小俎石
狛犬石
家石
見ノ岩
カメ石
碁石
ヨマ大石
大俎石
小俎石


流のこゝせを
おろう
歳を代も
居て猶とゝ
平石ゆく
杜蓼
石の上
渭ノ陵

仁保山妙見祠

仁保浦より山上の祠まで凡壮余町あり巨巖重り突出る下の方ふ僅に
拄と云へる祠の形とおひた屋根うり巖と云へる屋根と甚奇なり山の半
腹に鳥居あり繋り峡此の坂うり系統及の左の山の峡に巨なる奇石あり
大茄る小茄る石瓜石かと呼くべし共形妙なると云へる拙し実ぐん
あるとなりうて平生に後絶と淺ぎく清ぎるるの絶景

箱ノ岬

仁保の浦より西北の方にある本山の麓うつくしく其間七里の岬なり
海上に突出る支拔羣にて左右にならぶるものなり箱浦も又濱の方に侍
明神の社あり村中の生土神なり

大濱積之浦　生利ノ濱　花御前　もと岬の内に引る

船越八幡宮　大濱村に属り村中の生土神なり

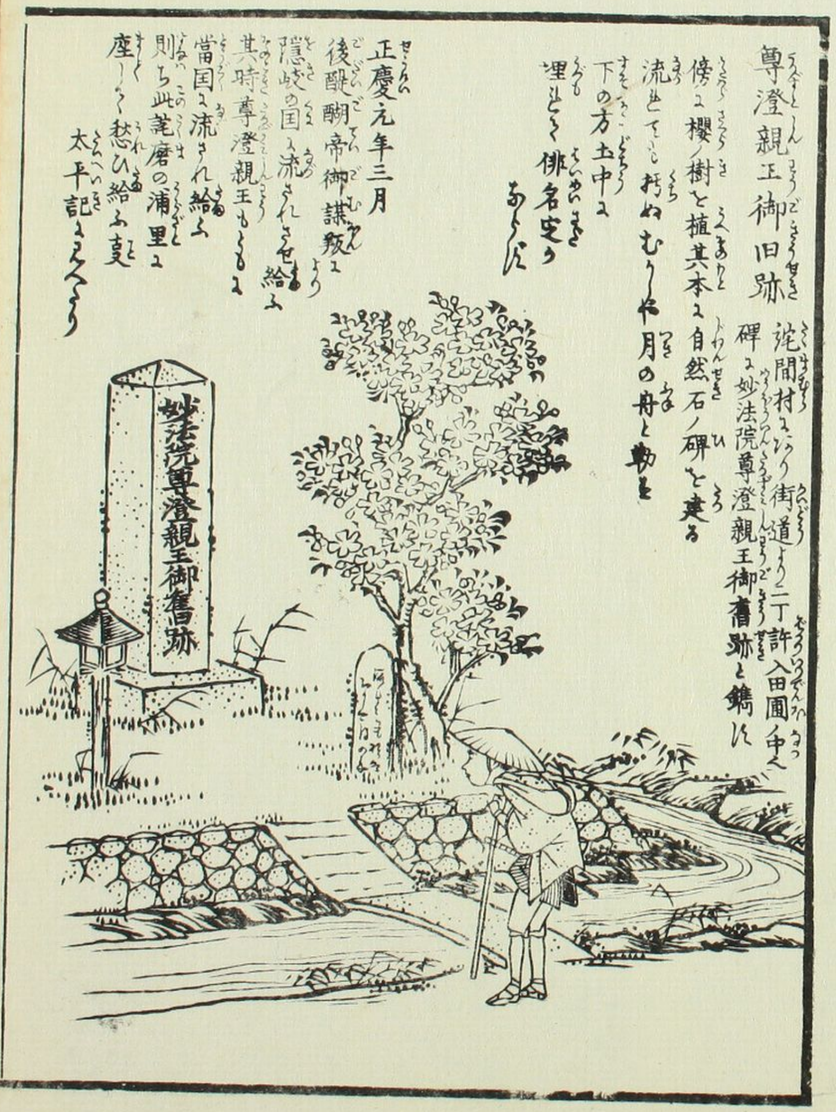
祭神　應神天皇　例祭　八月十五日　反橋　なし社のおもあり

拜殿幣殿　橋と隔なり　高良社未社鐘楼隨身門別當之館未
前ふあり
境内ふ列を拜殿の傍に男木女木相生の大松あり

香田ノ浦　大濱より絶向に出るわざなり

尊澄親王御旧跡　絶間村に街道より二丁許入田圃中に
碑に妙法院尊澄親王御書跡と鐫し
傍に櫻ノ樹を植其本に自然石ノ碑と建る
流芭てら朽ぬむりや月の舟と歌を
下の方土中に
埋とく俳名定り
あるべし

正慶元年三月
後醍醐帝御謀叛に
隱岐の国に流されたまふ給ふ
其時尊澄親王もまた
當国に流され給ふ
則ち此芦磨の浦里に
座しく愁ひ給ふ事
太平記に見えたり



海辺近き所なれば毒霧冲身を侵し瘴海氣冷じく漁歌牧笛は夕の声嶺雲海月の色こゝに耳に觸れ眼に遮る事の哀れと佳し御涙と添る媒とぞなりける

傳云此地は海辺の片鄙なれば淮南子の心を慰め奉る者もあらざりしが當郷の生土神濤打八幡宮の列當平生に奉り御物語の相人とぞ御光を慰め奉てしかは其後天皇隱岐の国より御飯洛つき尊澄親王ふも皇都に飯らせ給ふ是まつく彼列當の僧ふも恩賞を賜てしかるに今尚此社僧と仕て漁投と称ス

濤打八幡宮 [注]同村にあり當村中の生土神なり海辺の山に御本社あり[注]風の石階なり[注]奉の鳥居の傍に漁投の宿あり

祭神 應神天皇 本地堂 阿弥陀如来

末社 白鬚明神御輿舎鐘楼茶所隨身門ふ社頭に列ス

詫磨牧 今其古跡詳ならず何とも山谷なるべし

三代實録曰貞觀六年十二月九日[年]停廢讃岐国三野郡詫磨牧ヲ

鯛鰆之漁場 大濱詫磨の間浦濱と名る所に網と名く漁ス又大濱より三里ばかり沖の方わるしい箱の岬より四ツ余り沖に[注]潮ス是とても塩飽の佐柳島の西ようこそ

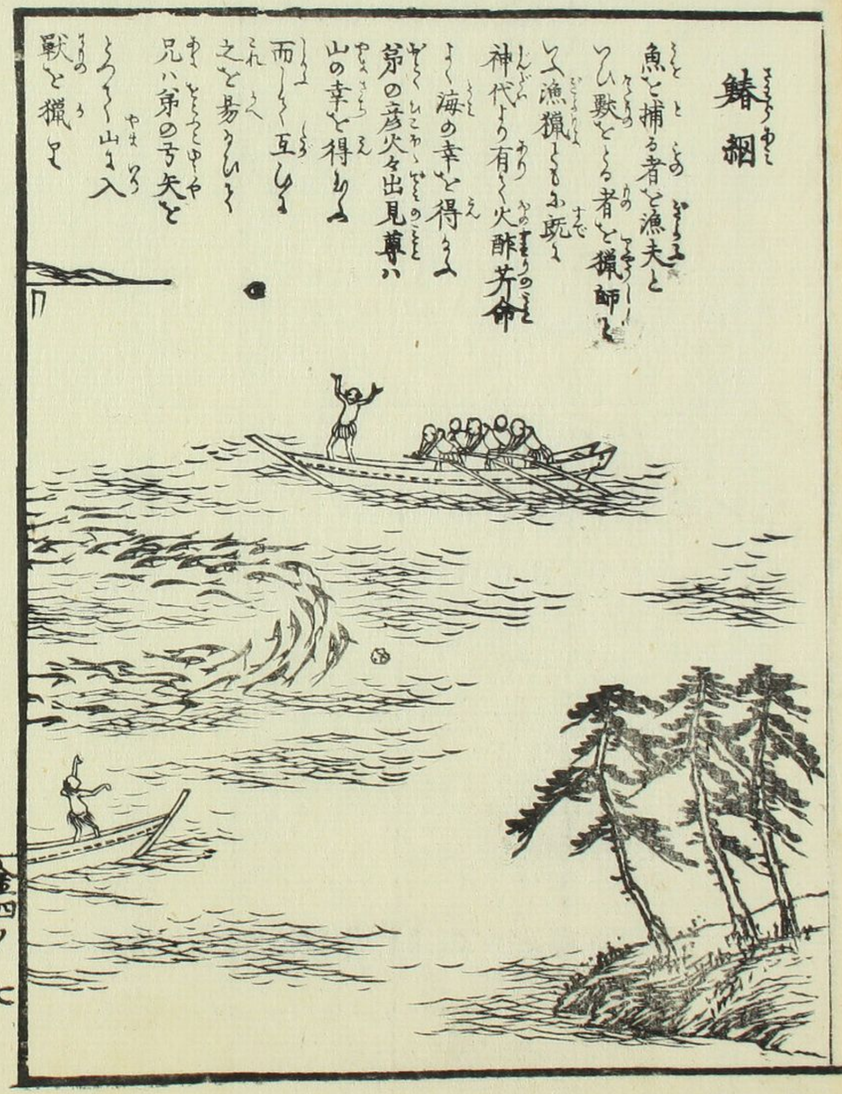
鰆を捕ふ流し網と云る具ふ長六七尺ふもの数を先漁師魚の集りなると磯に数十艘の船と列し魚を後迫ふ漕まとろく頻ふ追ふ魚逃まどひく終に労を酔ごと其こを先に進たる船ふ敷石を投る魚まどく驚き引ゝ遁れんとする時網を乱しく一尾も洩さじ網をたゝく攬網ふくもとり取なり

鰆の字ふ俗用にしく春月多く出ると云く書なれいせるなりしかるに形腹小く狭し故ふ狭腹狭腰と称ス

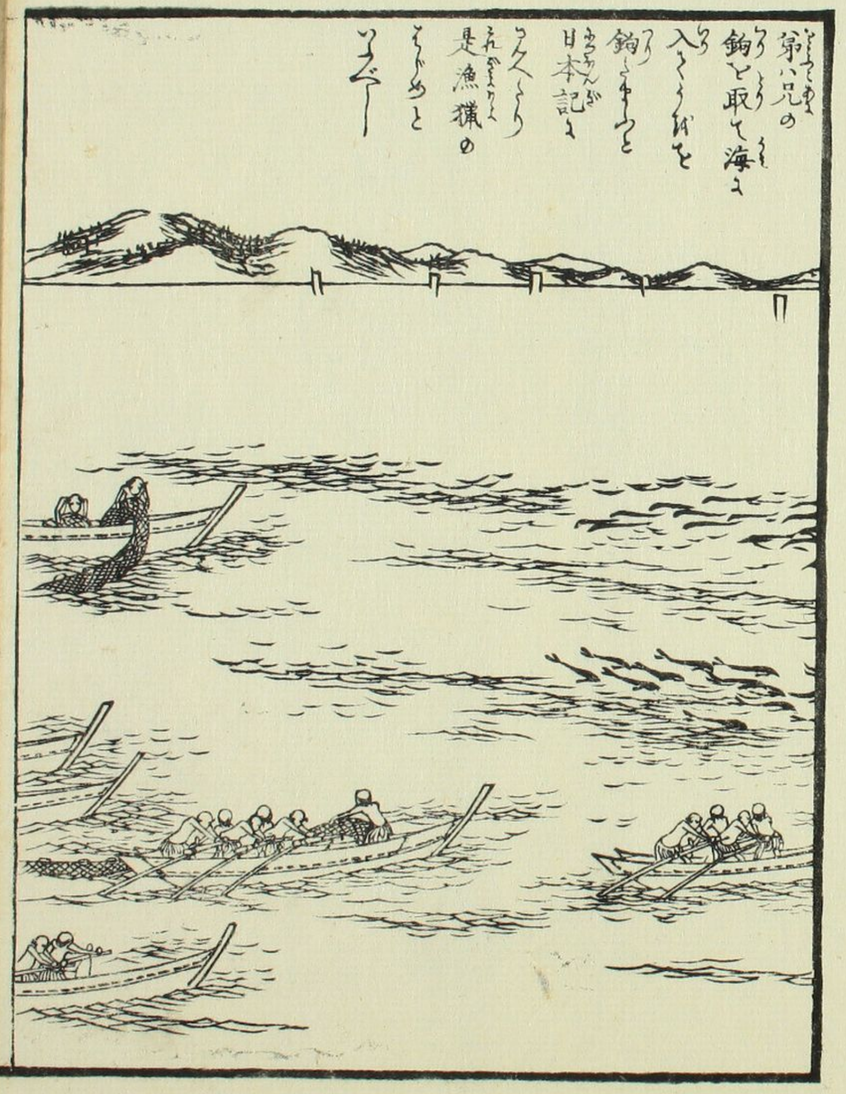
南産志云馬鮫魚青班色無鱗有歯一名章魚 小者曰青魚前

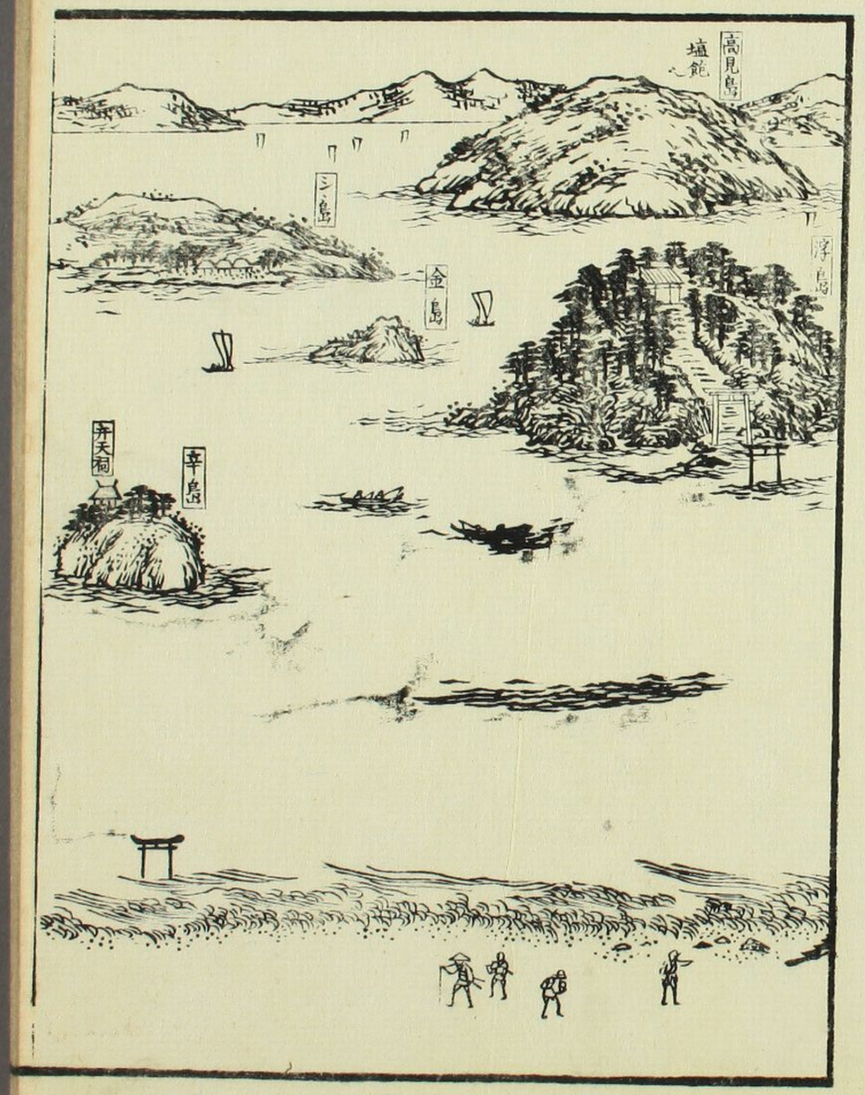
鰆網

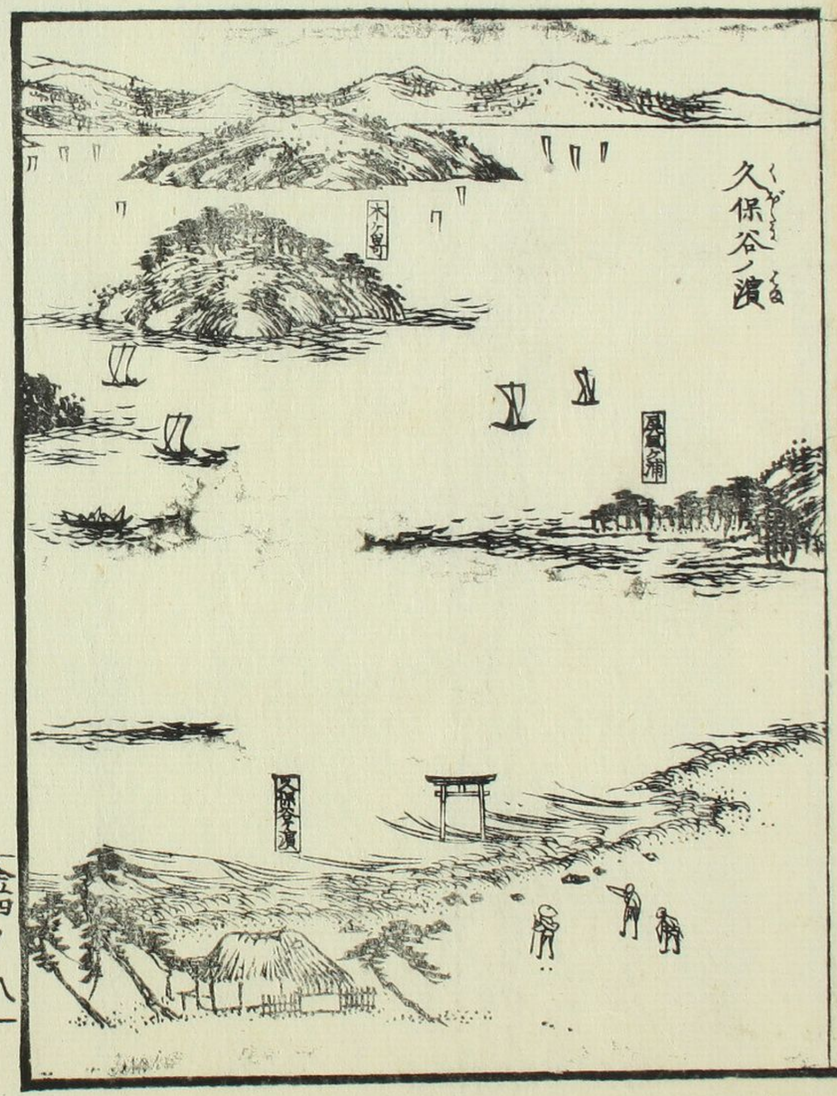
魚を捕る者を漁夫と
いひ獸をとる者を獵師と
云漁獵ともふ既に
神代より有り火酢芹命
海の幸を得給
弟の彦火々出見尊ハ
山の幸を得給
而互に
之を易給ひ
兄ハ弟の弓矢を
取て山に入
獸を獵し



弟ハ兄の
鉤を取て海に
入給ひ
鉤を釣給ふと
日本記に
是漁獵の
始めなり




高見島
埴能心
シヽ島
金島
浮島
弁天祠
辛島


久保谷ノ濱
木ノ尊
風賀浦
久保谷濱

本朝是とゝ〻く狭腹と充う鯛鮫章魚も佐波良と訓ぶ青菜
魚是を佐古之と云

唐墨 馬鮫の鰓を乾し製し邑形郭唐の墨に似るとゝ〻く名付
味い甘く微し澁し然とも鯔の鰓の唐墨さい如ど當地に多く製す
拔子魚 同所の仁保の浦新蒲の浦〻〻養〻〻諸国に出し

文字 鮒 鮑 鮸 以上三字とも古う加末須に用ゆ

浮島神社 大内村久保谷の濱の向に海中の孤島なり
山の上に宮居す土人津島の天皇と云祭神未詳
辛島辨天祠 浮島の左の方に辨天の祠あり
金島志々島木ヶ嵜 いづれも久保谷の濱より眺望の島にして風景よし
見立峠 西葉に見立村に属し東葉に白浮村に属し故に白浮峠とも号す 北十丈
屏風ヶ浦 白浮の浦より北に大麻山の小浦より此海辺すべて一帯の海にして屏風の如く聳立す

迦毘羅津濱 白浮の濱と云 筏石 同所にあり
経納山迦毘羅衛院海岸寺 白浮の濱にあり弘法大師誕生の古跡と云

奥院 弘法大師幼児之尊像 長凡二尺許 誕生の時作りたる由
脇壇 左右に大師の父母の小像 安置す 母は朝倉太夫阿刀大足の姉なり
四天王 大壇の四方にあり何れも大師の作なり
大師堂 木堂の後面弘法大師の像左右某師観音と安置
香川山城守の念持仏の時谷中に平生持ち給ひし仏なり今は拾
浴巾掛 大師堂の前にあり大師幼稚の時浴巾を掛し所なり
雨乞地蔵 取魔の時祈願の時雨を降す
子育観音 産水の傍にあり 産湯 大師誕生の時産湯に用ひ清水
五岳山善通寺 誕生院と号す大師誕生の旧地なり
古跡なり去文是非詳なり一統に大師の御父佐伯善通多度郡を領し

今の善通寺の地に居住し此白浜に別業なり故に此所にて誕生ありしもヤト云

本坊　奥の院の境内にあり且別に二構の堂舎あり

方丈客殿庫裡大師堂ホリ

海岸寺本坊

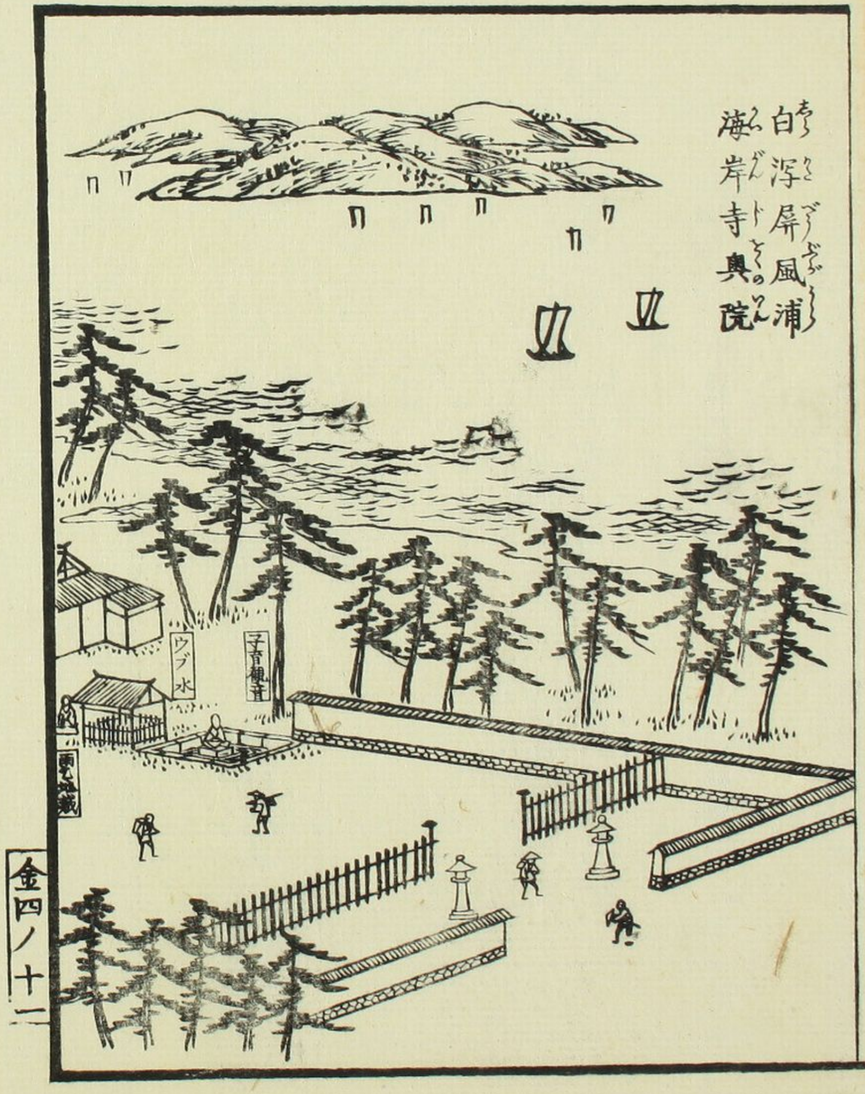
迦毘羅津濱

玉葉集

其ころの浦吹

磯なれ松

金四ノ十


白浮屏風浦
海岸寺奥院
ウブ水
子育観音
金四ノ十二

僧坊
本堂
大師堂
手水
ヒヲカケ松
若木
古木
枝石
未来
引汐
千手
舟の泊
靖羅

熊手八幡宮 厨川浦 多度津街道の傍にあり

多度津より十丁半乾の方にあり

本社 祭神 應神天皇 末社 本社の傍に數多列ん

神輿舍 鐘撞 隨身門 額面に弘法大師産神社とあり

神寶熊手 神代の兵器なりと云

十四橋 海岸寺の巽の方にあり橋の結ぶ石を建る始めは板橋なりと近世石橋に更る

十四橋 経之營之爰爲石杠石杠維貞 不審 不崩萬億斯年永福大拜

寛政五年癸丑初冬 細字本合書之

多度津湊 丸亀の船着より一里余西にあり是より金毘羅山へ未詳の行程三里

此津は圓亀小漬にて昔の昌の地なり原来波塘の構なく入船の便利よ

きが故に湊に泊る船影〳〵濱辺に船宿旅駕屋建つづき欵い岸に上酒

煮賣の出店温飩蕎麦の擔賣甘酒屋菓子屋等往来にぎる

又曰其余諸商人舟大工ホにて平生に振已且亦西國筋往返の船舶の門

金毘羅糸諸ふさんど徒は此に着船して善通寺と辨し象頭山に登る

其都合よきとふく此ふ船と待せ糸諸とるべきの事

来田山明王院道隆寺 多度津より八丁許東加茂村にあり四国霊場七十七番の札所也

本尊 薬師瑠璃光如来 立像の長二尺五寸弘法大師作平地東向なり

鎮守妙見祠 本堂の左の傍にあり 大師堂 本堂の内に 鐘撞茶堂 善清小家 皆門内にあり

二王門 金剛力士の両像を安し 本坊 二王門の外街左の左にあり 加茂村の在家此ふ次く

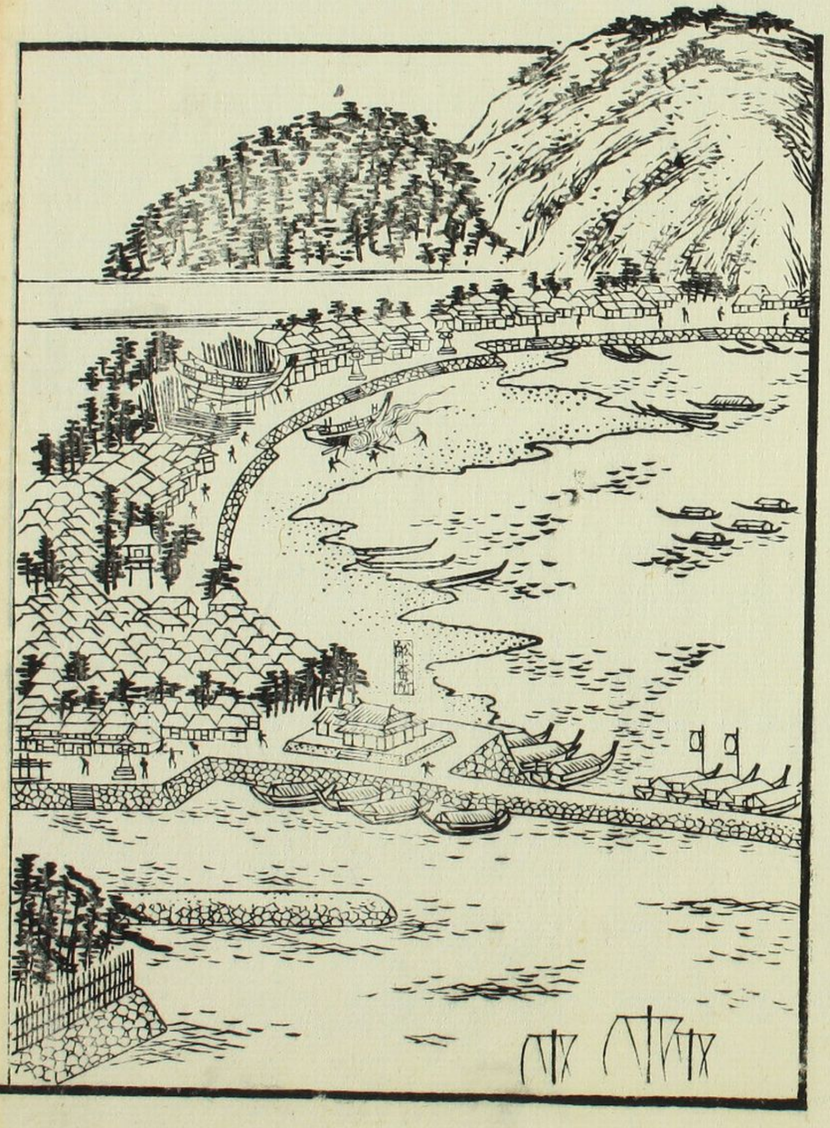
道隆之塔 本坐の裏の方にあり石の五輪なり開基和氣の道隆の古墳なり墳前に標に

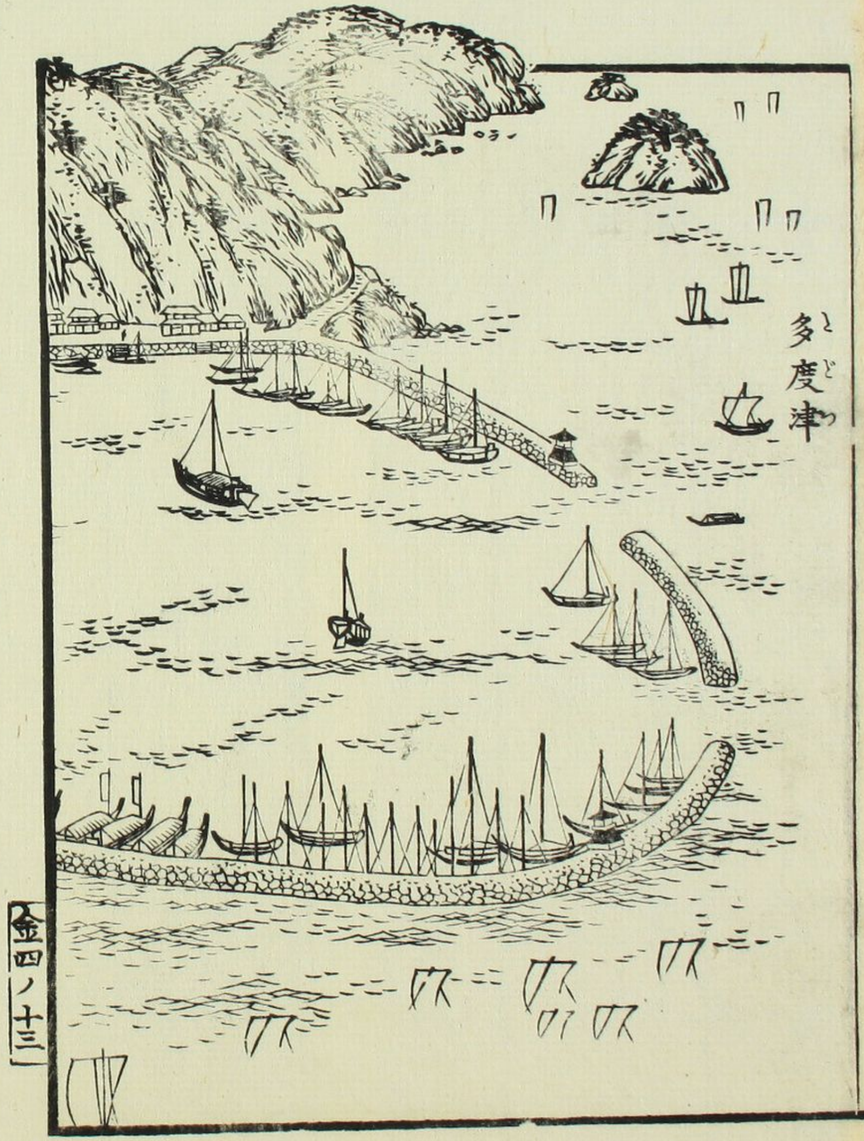
石にて道隆親王の塚と記せるも親王ふくい有べくば

當寺は人皇四十三代元明天皇の御宇入江乙長和氣の道隆と云人ありそれと

啓迪ととゝ今道隆は景行天皇十三世の苗裔父は那珂郡木徳の尸主和氣善

茂の次男なり嘗て道隆所持の園北加茂の郷にありこれを千株の桑と極る




多度津

所謂讃岐の国の素園これなり忽ちに其森中に圍九一丈五尺の大木あり種々奇怪の変ありしかるに此樹を伐て薬師如来の尊像を彫刻ゝ小堂を作て安置し且暮にれを信ぜ時に天平神護二丙午年秋七月十五日午之刻年齢九十九にて卒し其後孫朝祐と云人延暦廿二癸未の昇夢の告を蒙て弘法人師を訪ひ先祖の変を乞ひ彼桑佛を奉りて小縁を大縁と大師に請ふ大師其篤信を感じたまひ長二尺五寸の素師を作り右の桑佛を胎中に納め永世不失の秘計を擬し給へ朝祐ふく真乗に帰し髮を剃て戒を受け世塵を捨て精舎に此本尊を安置し大師を供養し奉て境内摽分四所四方を卜ひ堂塔を建頓し梵風を究めり先祖道隆より変起るゆえに名を寺号に弘仁末年朝祐の道大師を請じ結縁灌頂執行ひ遠近の道俗に

隨ひ〳〵相逐来る人所せきまで市をなす此時寺を十余宇作て群衆の人を住しめる余しろ佛法繁盛の區となり真雅僧正命ふ所にて住し給ひ後ふ亟て宝尊師も住し給ふ然るに一旦兵燹に罹り殿堂悉く焼亡しいまを昔ふ似ずとなりぬれども往古の遺具ゝ什宝弥多義なり事志ぶかきに是を畧す

鴨神社 加茂村ふなる當村の生土神なり遷宮祭祀ふ道隆寺より執行ふ

祭神 鴨大明神と祭る

道隆寺 寺記曰人皇六十二代村上天皇天暦元丁巳春二月那河郡真野の池の塘損壞なる変数度ふおよび故ふ真憲ふ詔ゝ法兵法寺明神遷宮を執行せしむ〻是別道隆寺第七世なり〻

義經寄附状 義經八島合戦の初當社ふ祈誓をなし給ひ翌年故城の後大般若經 神納の寄附状なり 武蔵坊弁慶寄附し奉る所なり 右當社の什宝と宝の物録なり

道隆寺

開田耕筆に象頭山より一里
余の所に道隆寺と云寺に
古墓あり〳〵道隆親王と
扎と建る親王に必らず誤〳〵
中関白道隆公なるべし此寺の
造立主なれば即ち寺の号も
呼なるべし
又或曰道隆の古跡は
讃岐国加茂に
明王院道隆寺と
右両説共に非なり
當寺の開發は
和氣の道隆と云る人
より起るとなり
道隆寺と号する

金四ノ十五

支實寺記に
詳なり
後人道隆の
文字同き史
考誤る
又當寺の
建石
道隆親王と
なるは
不當なり
世に斯る例
少なし

備中の国に此寺に来る
大師の忌日に四国遍路の旅人に
飯菜とくの〳〵施しる供養に
るぐと吉備の中山
高きゆゑと仰くるる人
未曾志留坊

恩ヶ岡　搒堀の傍法屋の天神より東南に行る街道より北へ〳〵森に行る所と

塩屋天神　塩屋村に行る村中の生土神にして菅公を祭る

慧日山光明菴　丸亀より立て許西の方街道の南の傍に行る塩屋村に属して世俗搒堀と云

本尊　阿弥陀如来　始浄土宗にして後真言宗になる故大日観音ホとも。

安置して別に常光明真言道場に称す

法然堂　本堂の右の傍に行る開光大師の像を安す

搒堀水　本堂の右の傍石階の下に行る至て清泉なり

傳て往昔法然上人搒とき門に穿ち給ふ所の井なり故に此名とも搒堀

早く慈じく海きの井水い大概潮の氣とて鹹く食用に成ぬ

此井水海きを出しとなく頗る清泉にして夏日ふも減ぜる事なくその冷

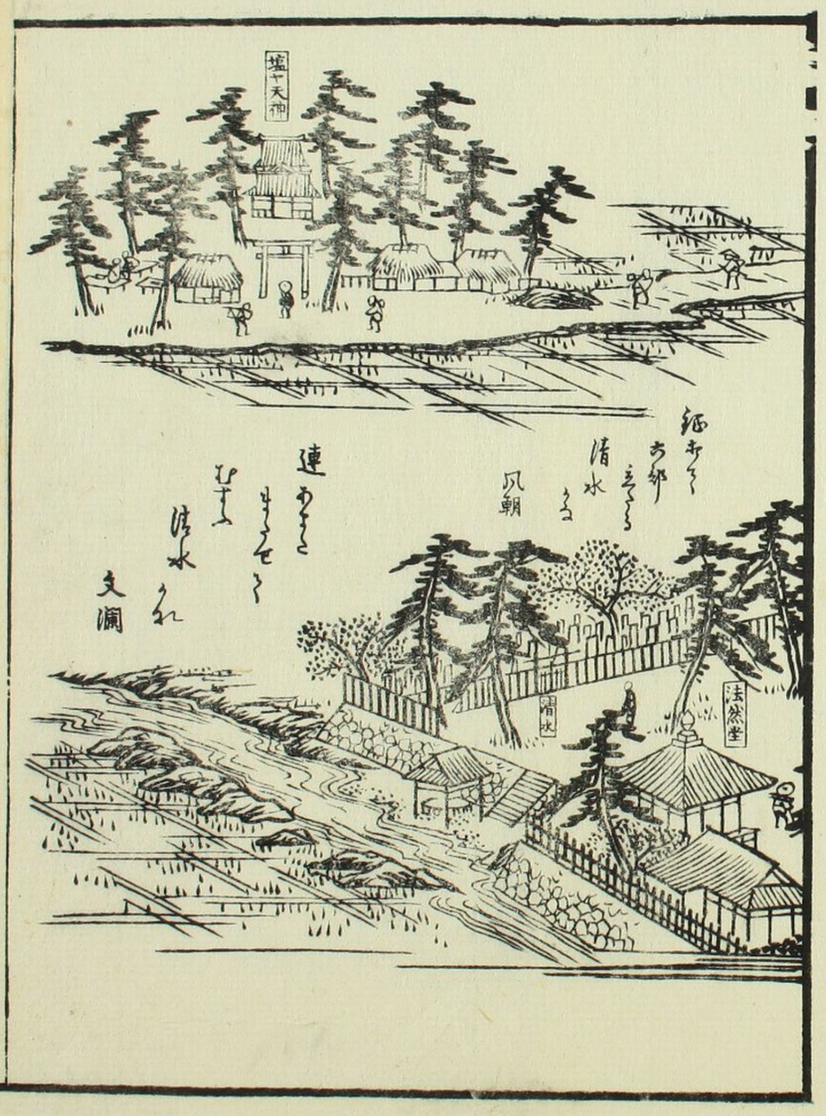
なる事言絶て街道の傍に標の石を建て狂哥を鐫す

南無い船にいるさい搒で堀清水未の世までも佛〳〵と佛

法然上人搒堀の水

兼元元年春黒谷の法然上人土佐国に流れ給ふ然て讃岐の国八月輪殿下の所領なりと以て此国に配し那珂郡子松庄なる生福寺に著せ給ふ其折ふし井を穿ち給ふ在しこの

光明菴
撈堀之水
塩屋天神
清水
本堂
茶所

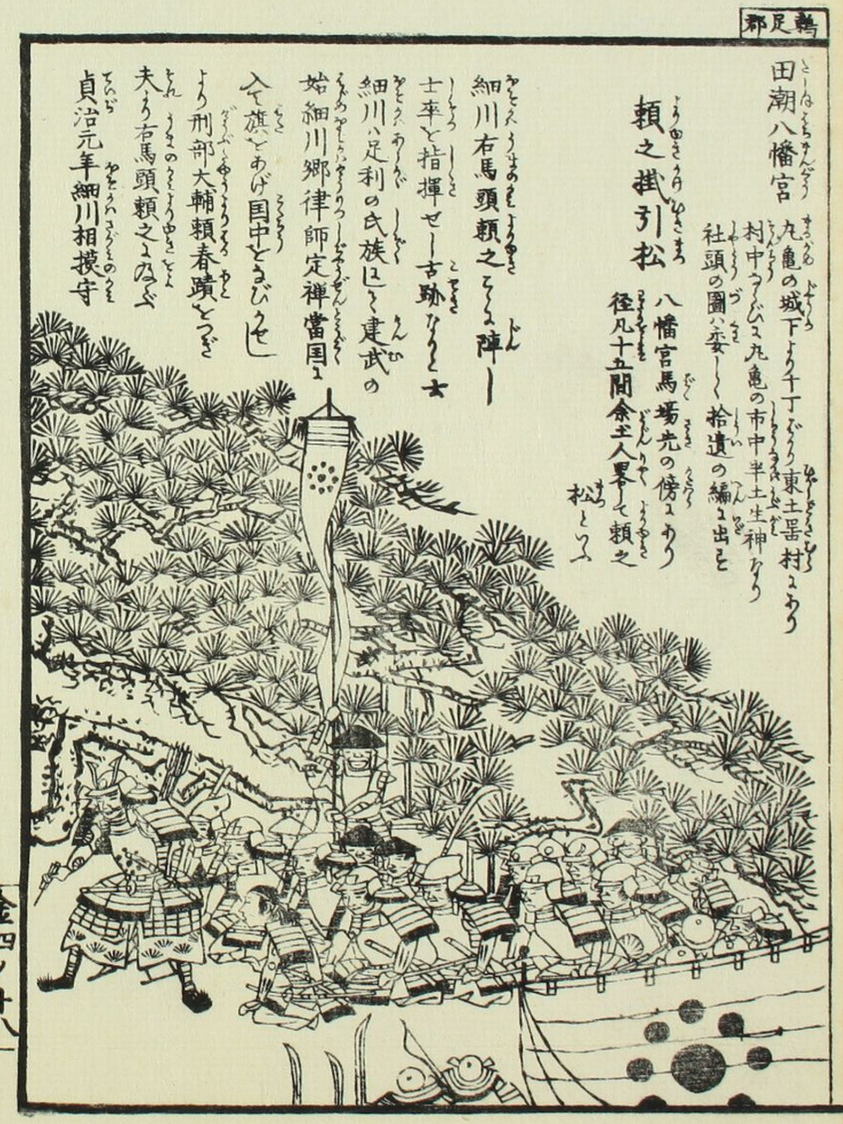

塩屋天神
清水
風朝
法然堂
清水
文瀾

田潮八幡宮　九亀の城下より千丁ぐらい東土器村にあり
村中にあり九亀の市中半土生神あり
社頭の圖に妄〳〵拾遺の編に出る

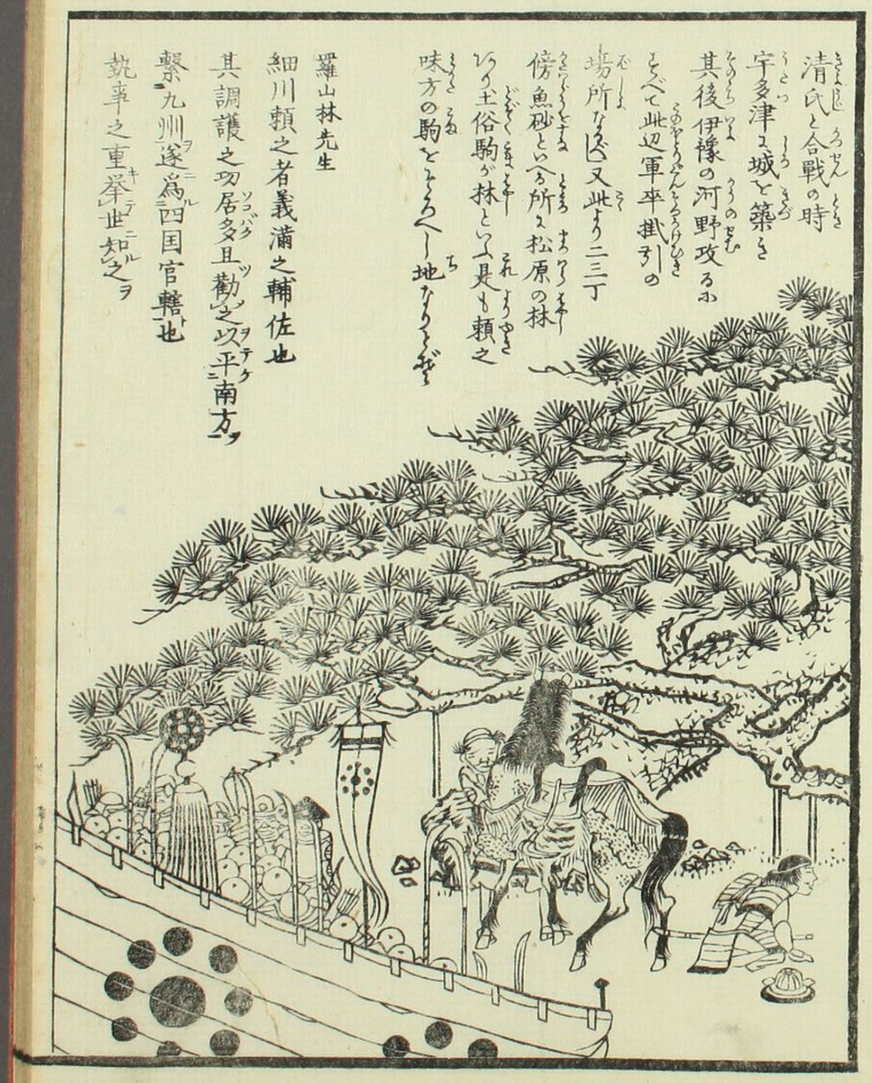
頼之掛引松

八幡宮馬場先の傍にあり
径凡十五間余主人畧して頼之
松と云

細川右馬頭頼之こゝに陣し
士卒に指揮せし古跡なり
細川は足利の氏族にして建武の
始細川郷律師定禅當国に
入て旗をあげ国中をとりこ
より刑部大輔頼春蹟をつぎ
夫より右馬頭頼之にゆづる
貞治元年細川相摸守



清氏と合戦の時
宇多津に城を築き
其後伊豫の河野攻るに
こゝを此辺軍卒掛引の
場所なり又此より二三丁
傍魚砂といふ所に松原の林
いの土俗駒が林といふ是も頼之
味方の駒をこゝ〳〵地なり



羅山林先生
細川頼之者義滿之輔佐也
其調護之功居多且勸之以平南方
繫九州遂爲四国官轄也
執事之重挙世知之

青之山 鵜足津より當国の名山なり古奇なる青の山風など深でゝ此山なり

小烏明神社 青の山なる山上なり此所の生土神なり祭日烏来つゝ所世と家む事あゝと奇異の事なり事實詳なり

亀石権現社 寄津の街の西の端の海辺なり

村老口碑書之

いにしへ天文十年此浦の未申の方より夜ゝ怪しき光りものゝ海上を照せる度数日ゝ漁事なりさる漁者ども行業を失ひ是を怪ゝ金毘羅大権現を祈誓とひ相歎き漁者ども毎夜海原を空しく眺め居る折しも同年六月十七日夕百歳ふも余りなる白髪の老翁ひとりもゝ此汀の亀の形なる石上に来り此漁者どもを招き示すゝ此汀未申の方より光りものゝ所に象辺山の火災を焼ぬまゝ霊験のこゝなり急ぎ世ゝと彼岸に苦げ彼尊像を移ゝ清浄に安置せし苦終て失せり漁者ども奇異の思ひをなして明るもまゝ則この不ゝ垢離をして象辺山へ

詣ゝ急ぎ此事と告れば一山の僧俗打驚ろき此彼と尋ね奉るに本社の傍に一柱樅ゝ大木の焼残りの有相ゝ大悪の小像魏然ゝて立せ給へり人々立ち取おゝ一堂に安置ゝ奉るに是則ち今の観音堂の本尊なりされば漁者ども彼頭ゝ老翁いかゝも亦ゝ金毘羅神の顕現ゝ給ひての法利益とおもゝ奉ゝ毎年六月十七日と縁日となゝく亀石大権現と唱ゝ奉る遠近の村人此所ゝ参詣ひゝ石ゝ来詣ゝ群集する事今ゝ絶ずゝ

鵜足津 稲足郡にあるゝ号く諸船入津の湊ふゝて商家建つらゝて賑ゝ

鵜足津城 貞治元年細川左馬頭頼之の地ゝ城ゝ築き相模守清氏と戦ゝ清氏の陣白峯の麓にあり頼之の陣ゝ宇足津ゝ れば其間僅ゝ里ゝ五隙ゝ密ゝ教ゝ送ゝ

佛光山道場寺 宇足津ゝ西国遍礼第七十八番の札所なり

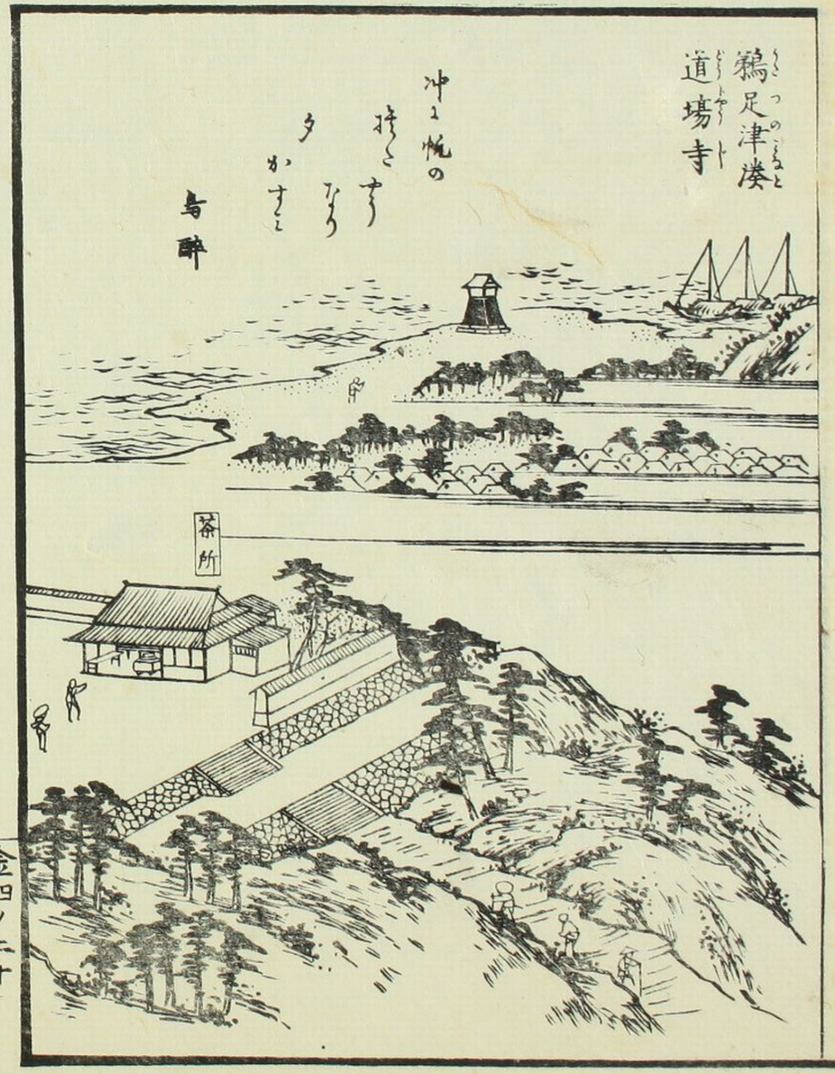
本尊 阿弥陀如来 座縁長一尺 弘法大師作 本堂南

大師堂 本堂の後ふあり弘法大師の像を安ず

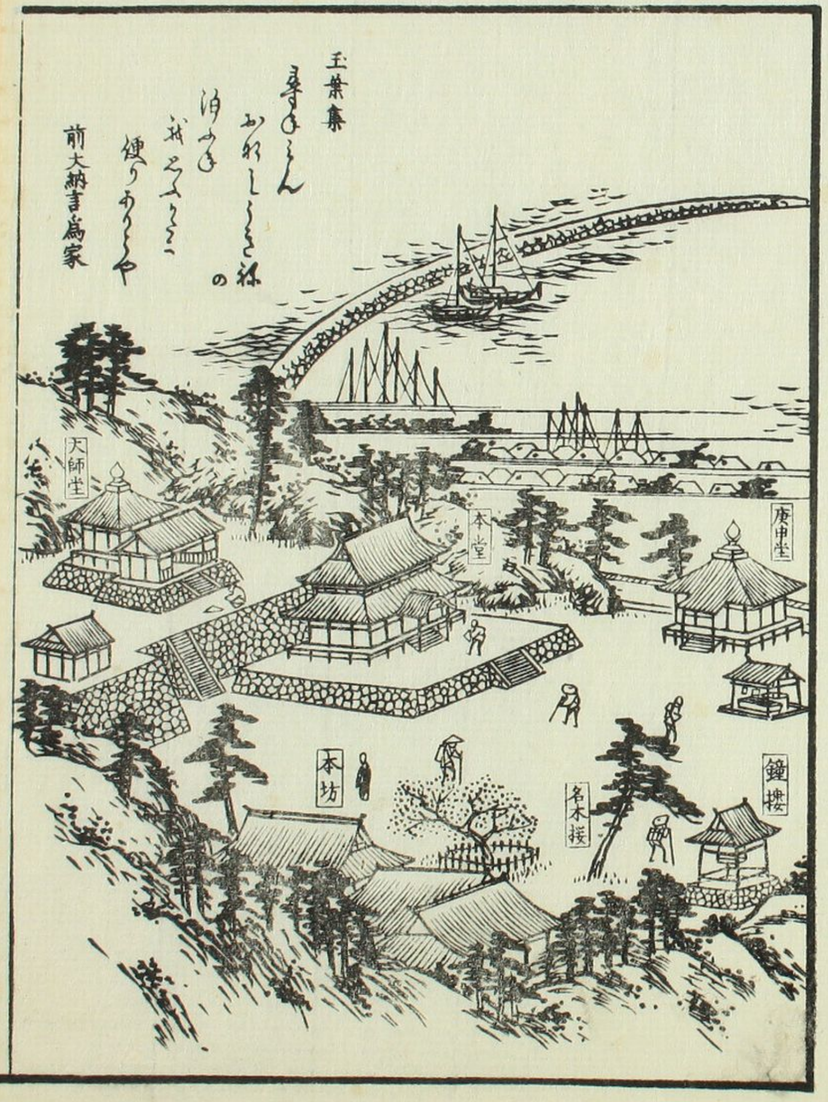
鶏足津湊
道場寺

沖こ帆の
行くと
夕
かすと

与醉



金四ノ二十

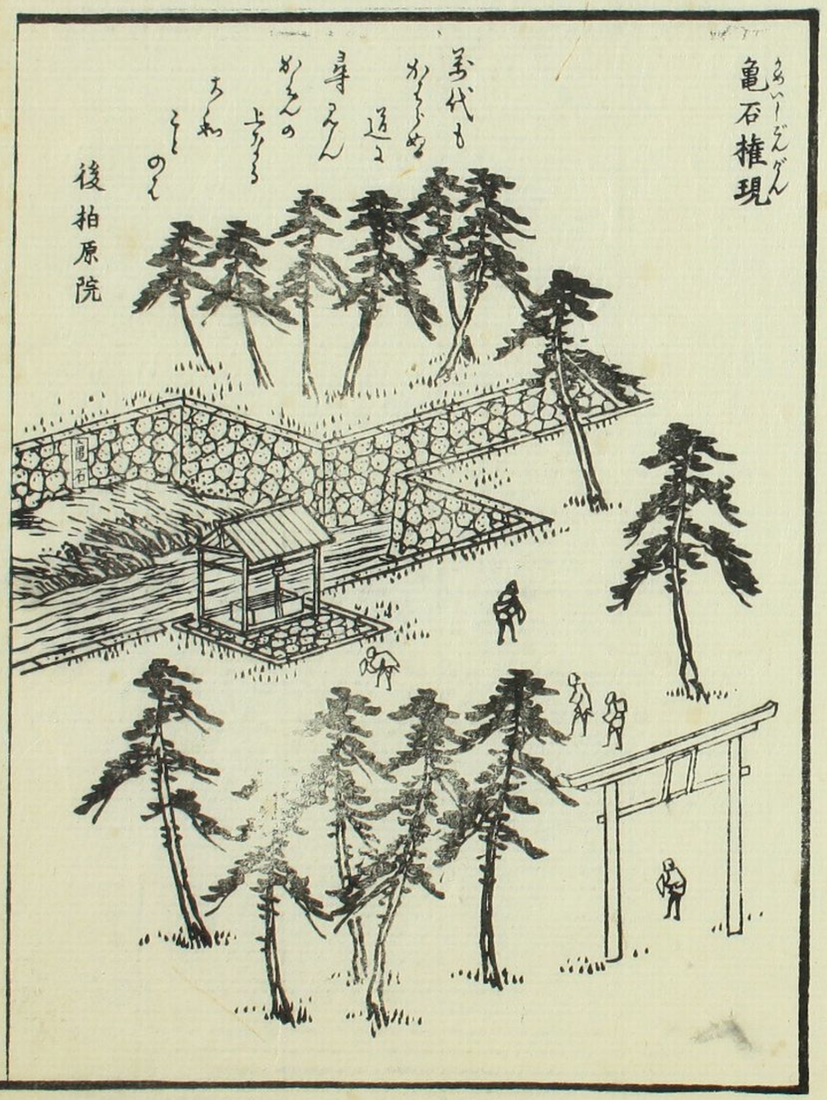


玉葉集

春ゆくと
ふれししらせか
泊瀬
の
山の
鐘
聞
や

前大納言爲家

庚申堂　本堂左の傍に青面金剛童子と安置し
茶所　常掘侍り庚申堂に云ふ　鐘楼　茶所の向に云り
本坊方丈　本坐の右の傍に云り　名木の桜　樹桜ふしぎ至つて花〻〻〻〻
本坊の前に云り
茶堂庚申堂ホの傍より眺望せバ落海漫〻と〻塩飽の島々に漁り船〻追風
ふ走る通船宇足津の泊舟など眼下に云り〻風景言て絶り
或曰高野山の道範阿闍梨根来の衰に云り〻仁治四年當国に滴遷せ〻と
給ふ其始め宇足津の幹。橘氏に預け〻〻道範自ら祀せ〻て中に在家少く
引上て〻〻堂舎一宇僧坊ある所ふ移〻〻と〻る此所地形殊に東に望み
弧山夜月をそゝげ月輪の観と勧め西に向て〻〻遠島夕日と合て日想観
自ら窪に後ふ松山聳〻〻海中に〻〻
いとゞ〻〻絶ぬ〻〻　杉風の涼も寄せぬすゝなりせバ



或時山上のぼりくだるに波〳〵

彩足津深この杖後に風を生ずるの所をも今の人見て

思〳〵に道範寓居の寺は蓋此寺なるべしと云〳〵

圓亀二年有て〳〵四國の靈場を遍礼とて輩は當寺に立〳〵れんとゆるしたる

故に金剛杖を寺より出し上に弥陀觀音勢至阿字ホの梵字を記して四句

の文を書く是に教珠れんさこと足中を履先慈ホの形せ〳〵ものと出し遍

路の徒ふの〳〵是をうけ〳〵順拜を

壹平山宝光院聖通寺　聖通寺は村上源大師の開基なり

本尊　薬師如来　石像なり　海中出現沖之薬師と称し

大師堂　本堂左の傍にあり　観音堂　本堂の下右の方にあり正面観世音左理源大師

弘法大師と安置し　右不動明王安置し

鎮守辨天祠　観音堂並ぶ　御供所　弁天祠の前にあり　鐘楼　弁天祠の向にあり

本坊　境内の右の傍にあり　野澤水　門外の傍にあり通称を双の清泉なり

當寺は人皇五十六代清和天皇貞観十年聖宝理源大師の開基なり則聖宝は

當国狭岑郡に生る歳十六戊申に真雅法師に投し出家し三論を元興寺の

顔暁に学ぶ金剛峯寺真然および源仁に習ひ密教の秘奥を稟け貞観十

年故郷沙弥島狭岑同じ法を開かんと給ふに其地狭隘なるゆへ寺院をいと

なむに足らざる故に此寺を建て聖宝の二字をとり壹平山聖通寺宝光院と

号し本尊薬師佛は其草剣の図の海中に夜光のりのひかり恰も燭けごとその

上に常に雲気あり人〳〵奇異の思ひをなす終に漁人網を下し〳〵引に盤石のぬく

ふ〳〵動うごく迚ち人水に没し長龍に係て車に引めぐるに石像の薬師如

来なり端厳妙麗ふ〳〵慈悲の相を成を見て人驚嘆し遂に草堂を建

て其像を庇ふ今其所を古薬師と云斯る奇異の佛像なるとて人

當寺の本尊とし利益ゆゑ故に貴賤ともに群集し澳の業師と稱し〻く尊信し

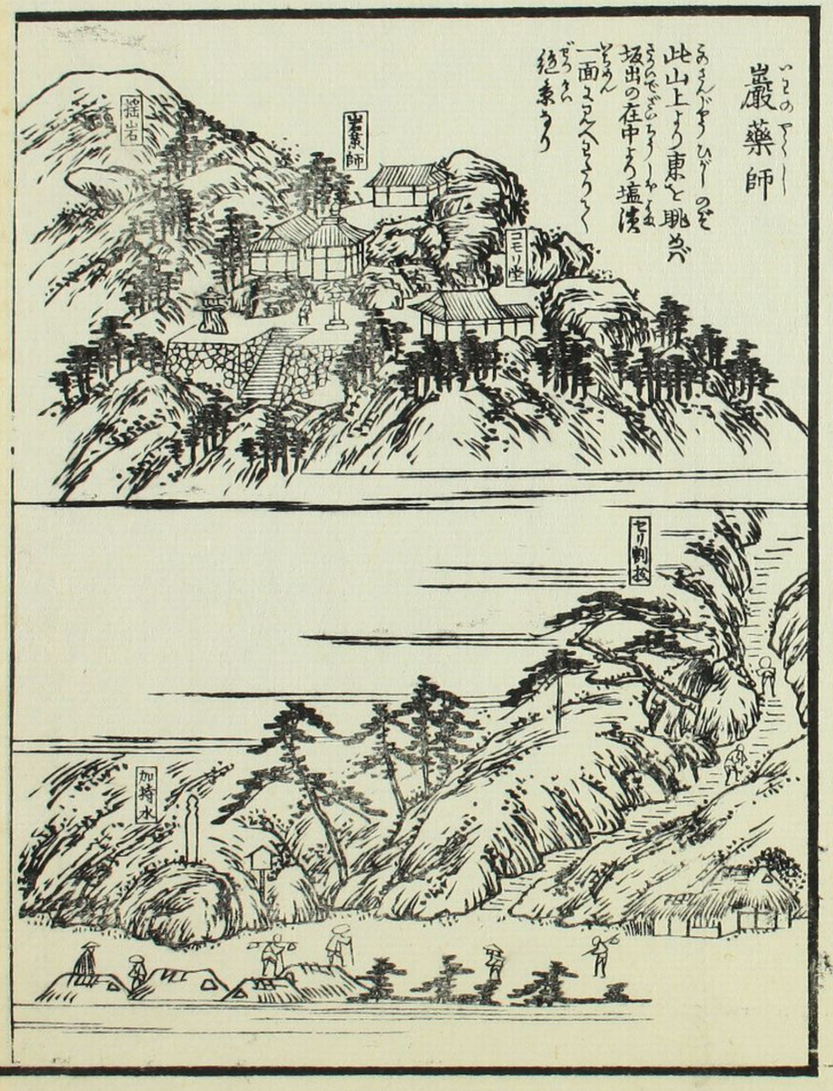
聖宝其の後ゆくゆく去さ醍醐寺と開き顕密の二教を演ぶ尓〻くまさ南都東南院と建さ三論を講ぜ寛平二年貞観寺の座主となり延喜二年僧正となる同八年秋七月普明寺に於て逝し時年七十八

巖ノ藥師 本堂の左の山上にあり往昔岩と穿ち一時中より出現しうの故に岩の業師と當山の奥の院と称し其説あくまなる方宿願の者平生業障するの発し

加持水 岩の業師の華ふあり則ち往昔の僧世利割松山の平腹ふあり巨岩の間より生じ

揺巖 岩の業師より二丁許上にあり丸一丈余人これを動さば巨岩たちまち揺ぎ故号く

聖通寺山ノ城 本堂の右の後の山上に古跡あり天正年間奈良太郎兵衛揺篭丞之天正六年の夏藤目の城に敵向の條に鵜足那珂二郡の旗頭鵜足津聖通寺山の城主奈良太郎兵衛尉勝政とあり



聖通寺

當山は聖室尊師の開基なり也と聖室の二字とよむ〻聖通寺室光院と号ス

元亨 教書に曰
仁和三年勅詔〻七佳法河署梨佳と場う
寛平二年貞観寺の座主となり同二年僧正とう
同九年醍醐と場う〻官寺とはう〻聖室の南ふ
二京を普〻遊行〻其文配せ〻也〻所〻と
言ハ東西の二寺醍醐東大寺および興福
寺ホなり延喜九年四月に普明寺に
於〻病床に旁臥る〻太上皇御幸ア
ひ〻其九地とゝしたまへり七月六
日に帰寂せ〻ると云〻

天正十三年仙石権六衛尉秀久当国を賜る然るに此国年来七雄の乱
曽我部元親覬望を逞し救回戦ひの街とうかさ国中馬の蹄かり田園荒廃し
芒所となり民庶困窮し年貢も闕如し故に其張本人を穿鑿して召捕て終
小十三人宇足津聖通山の麓に於て釜を居へて悉殺を斬る是を見懲にされ
ぐもかへつて民懐ぶ山間幽谷に逃走るかをび国中に変りうん貢をおそれ
刑を行ふ苛厳重なり尤香東那安原山に先主香西伊賀守が巣穴なる頼平
の子女を入置たる匿家なれば山人等是を罪せらるとんらと怖て山中を出で近
郷の民に命じて誘ひて山中を引出し容隠の罪なりて山王安原甚太郎
其下の頭人十二人宇多津聖通寺山の麓に於て磔にかくる其下の凡民百余
人獄門梟に其暴行を見て凡下の輩四方に逃去る
嗚呼戦国の苛政酷しいとは怖るべしされば今太平の御恩澤に浴し昼は終日

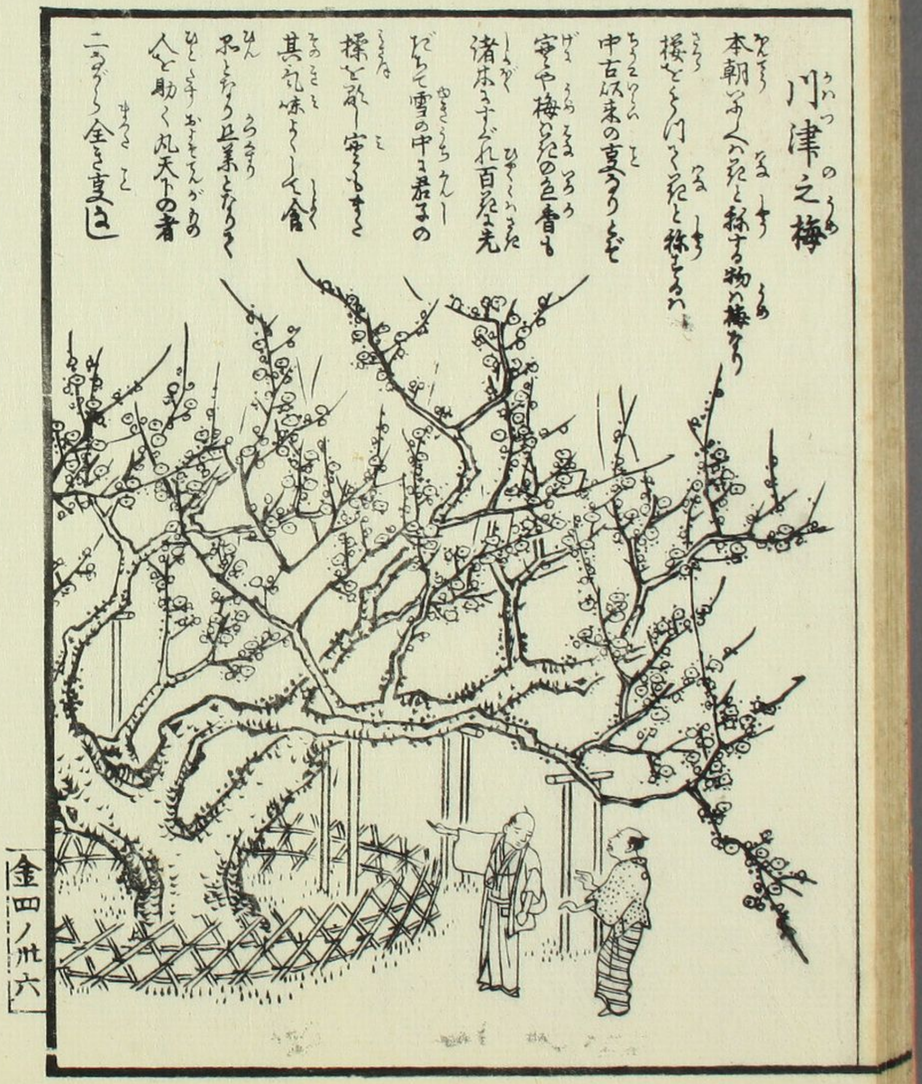
産業に力のまゝに勤め夜は枕を安くに安寝をも敢び國恩に報
べかりしされば国政の按配とは上を教ひ下を憐み身を修し業を専らと
人の害に成べき苛政の露ばかりも爲ざるこそ本意とすべし

川津の梅　川津村高木氏庭中にあり哥津より十三丁九町より三十丁余刈阪の山の麓
古図に　の先祖に高木右馬之介と云る大力の人あり旧家に梅樹あり四方に繁茂し
梅樹の高さ二丈三尺余　本の廻り二丈三尺余　廣さ五畝十五歩
東柱の数　九十六本　今古本となりて昔のごとくなり
天に満地に満ち梅の白しいれ

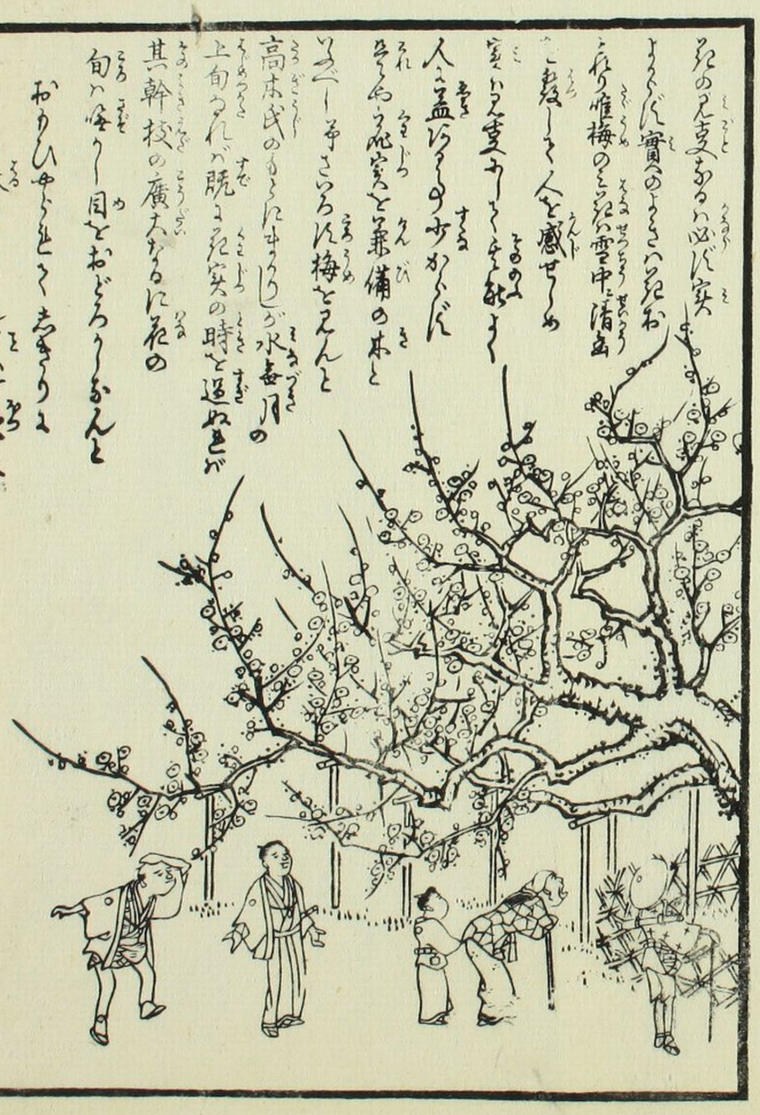
飯の山　川津村の山分なり西国第一の名山にして四方渫後の富士も称し又方山
渫後ふいとれとや富士とくの山朝けの烟たゝぬ日もなし　西行
飯山権現社　山上にあり渫後の国造鷲住王の夫人を祭る妃を不動明王某師佛小安置の堂なり
鷲住王は人王十八代履中天皇の后宮二女の兄なり鄰魚磯別王のまなり

川津の梅

本朝にて人の花と称する物は梅なり
桜をもて花と称せるは
中古以来の事なりとぞ
実や梅は花の色香も
諸木すぐれ百花の先
だちて雪の中に君子の
操を守り実もまた
其気味よく人食
不可なる五味となりて
人を助く凡天下の者
二なく全き事は



花の色香あるは必ず実
なくば実のなきは花おも
なし雅梅のごとく雪中清香
こと表しく人を感せしめ
実は花を兼ねて
人を益なるものなれば
花実を兼備の木と
いへ予さいろは梅をえんと
高木氏のもとにまかりし水無月の
上旬なれば暁に花実の時を逃ぬ
其幹枝の廣大なるに花の
旬の全く目をおどろかんと
おもひ中ごろ
春をまつ事と欲し



金四人扶七

坂出の川口はてこぶる便宜ゝ
舟着る奥入津出帆平生
に絶ゝ在中ハ高松街道の往
還ゝれゞ旅客の通行る繁
の往来ゝゞく商家建つる
ゝゝ張ゝゝ地ゝ漢四
ハ数丁の塩竈続ゝ
なゝ宇多津ゝ凡一里弥来
まゝゝり

其性質強力にして身体壮大なり八尋の屋を馳越て遊行し天皇甚
強力と聞て使を以て是を召し勢多の住王い卑賤なれども強力の者と友とする
支好と儀則と匡君長に對する支と喜すび再度使を以て召せども終に
来たらず其後に屢召給ひ年歴て當國に出る那河那に辰巳強力の
者と聚め力競と支と壮勇の者と友とす相撲をり斯りして程なく
の帯を佩て樂浪国造と号給ふ勢多住王卒して後別致の豪友を亡
跡を慕ひ社を造つて是を祭る河内山雄況是なり其子孫相續て其
所を守る此に喬木の有るを高木と云て氏と云是より大力の者の出る
支今に絶ず近世の高琢山常善提院および高木右馬かなどゝ呼れ
大力者も其裔なり故に敏山を力山ともいふ　以上南海治乱記に出
傳云往昔當国高松の城下光顕寺の住僧強力

光顕寺の住僧強力

かゝる世人日本無双の大力者と称し是則ち高木氏の子孫なりしかるに
然るに僧にかゝる人の孫と傳へて故に怪力の血脈を引絶ることなく良純武
時彼行の爲に東國に赴むく物の道と思ひ夜深く旅宿を立いで
里離れおのれ人道の傷を健る男四五人立ちまじりて容色声色共に
年饑饉なれば追剥さんと思ひ行ぎ止まるあく孫び用心さんとして
彼男やゝ御渚路浪場らんと呼ひて前後を遮る良純彼男どもと争
打ち投擲さん事い安からぬ出家の身なれば慈心ひけ難べ追排ふ去
と思ひ並木の松の元まで走りかゝりて曳といふ引せ引ばその四
一間ばかり引さけて抜出ると手に引ぎ打振やどに松の枝大鳴くと
い吹ぬ風と驚く微塵ふなさんと罵ひ盗賊おびく戦慄さる人間ふ
べからん當に天狗の所爲ぞと思へ敢さて逃ぬ或時馬上ゆ行ゆ

ゆ七すまり程の行とかさまよ持く振ゆ上ゆ抜くゆ馬の足並つよのごく
みもカと出と体ゆ上ゆ又一日知音の禪寺ゆ珍客と清ちゆく新ゆ石の子水鉢
とゆ入ゆ良純ゆ迎ゆ来つく是とゆふゆ水鉢裏表ゆ変りく居ゆ迎ゆこれい
甚ゆ苦しく居ゆ迎ゆ亭午の時分ゆ既ゆ三十人ゆく
終日苦ゆく居ゆ巨石ゆれば如何ゆく容易く直ゆ得ん我ゆ力ゆ良純ゆらば
愚僧ゆ迎ゆ黒衣の上ゆたきとゆけ庭ゆ下ゆく石ゆ上ゆ
ゆく推回すに始め三十人ゆ八分ゆ力ゆ自由ゆ人ゆ
少ゆも霞ゆ迎ゆ得ゆ禪僧ゆ年ゆ盲ゆ力ゆ心ゆ実ゆ驚ゆ
怪カカ　公ゆ力ゆ夫ゆ子ゆ性ゆ宿ゆ方ゆ石ゆ二十石ゆ縁ゆ上ゆ還作せ
よと所ゆ行ゆ是全く佛道の障得ゆ今日ゆ水鉢ゆ迎ゆ歩ゆと言ゆく
ゆ顔ゆ大ゆ変ゆく常の光敬寺の面相ゆ行ゆ全くカと出さんと思ゆく

氣勢を見て出家せんと願ひ佛心に背き一度出家となるべい其用あらば今より後止らるべしやといひれば良純云ふ我なれと乘りくこれを身終るまぐかと出さぐ[illegible]と碎王給にえくり

飯ノ神社　飯山の西藩より延喜式神名帳出雲足郡二座の其一なり

祭神　一座　飯依彦命　飯の山に至る支宇多津より三里半

魚ノ御堂　坂出より三丁余南新濱村あり今八僅の小堂一宇あり薬師如来を安し

傳云往古殯留霊公毒魚と退治し給ふ其霊崇りをなし疫疫行なる是を鎮めんが爲に建る所なるいひに行基菩薩海中より上り大魚の骨を

つゝ造り給ふ故に両説ともに殯留霊公毒魚の説を以て毒魚退治の話は次に記せばこゝに略す

八十八之水　小西の庄村の街道の傍あり国中第一の清水なり水源は五丁斗北の山上にて某師如来の小堂あり土人崇徳天皇の妻の流とす

八十八の水

或は遊場ノ水

又一説に弥蕪波下書

又野沢の水とも云へり

往昔崇徳天皇幽御

時御遺勅の趣を

皇都へ〳〵い奉るの間

玉體の損せ給ふ事を

思慮て此清水を金瓶に

浸し奉り介し

後此水つゝ霊

服する者諸痛病

愈ぶるなり

国中に清泉多くして斯る涅槃なる良泉多く所謂温
泉汎泉の類ひにて正出のことなり此水は汲浜泉ゆえ水勢熱く恰
も滝の源なるふ似さる原来二伏の暑さに清冷すくなくと斬ぶ如く玄
冬素雪の寒さに温和ふくに茅と煙くも難らびされば往来の旅客及
日に炎く憩ひ渇と潤ひ苦熱と避け馬士い馬と樹下うつぎて水と掬し
傍ふに西瓜素麺心太美酒焼酎ふと冷して者ふ庇とぶに行人これと飲て
炎暑の労也と忘る光此水源とて凡是より五丁ばかり山の裏さいりく涌
出巌穴に其上に石佛の薬師如来と安小堂と霞ふ傳らく姑に此小堂
く只石佛のみ有り と堂と管むさるして堂内の床上に安置せしふ忽水止く
出ば衆人おどろきさく如く石上に下せば水湧良本の如く故に此堂内本尊
の在と所い庶ふく水源の石上ふ故に實に奇異の清泉とぶされいや

往古悪魚の毒に中とる官軍と救ひ崇徳天皇の御宇に浸奉ふ不の奇瑞也
主会 往古日本武尊西州の熊襲と征伐の折ら吉備の穴海に今の茂戸の
大魚に乗り尊出陣の時其行粧ふおそれ南海に入く形と渡に金浪に熊
襲と退治し凱陣給ふ所大魚に還乗つく吉備の穴海の前洲後の稚
戸ふ向さく客艘の結ひとかん尊是と手らびんと潮乱河野の山邑に入く
大木と雲こと繋く窮船と造り尊自らされる乗じく大魚に向ふ悪魚
走り来らびく尊の舟と呑む官兵おのく狂風と仮く大魚と斬る是に依て
魚轉倒く南の方福江に入船中の人其氣に向く醉伏る尊一個魚後
と切割く出給ふこれさに向く国吏邑民の向まり来りく魚ところさに官兵
と助け出に時に一の童子忽然と顕出一瓶に水とのくたつさに来り尊に奉
る尊こと此と給ふに此清明とかるとこるに向く曰此水いつくの水ぞと

日本武尊悪魚ヲ退治ス

羅山林先生
日本武尊者
景行帝太子也
西征東伐以平
國国除方業也
其霊為神

重ヲ啓ク此ハ越夫の俤傷の水なり尊のたまふく願くは吾士卒小呑め
必死と救ひ給ふんや童子諸ヲ邑氏と引く其清水と汲しめ其面ヲ
ぎ其口ヲ呑しむ其ニ忽ち其毒氣ありて急く癒ぬ故ニ此水と号て八
十生水とつけ其ヲ八十生八十八ハヒフヘホの又云其附官云八十人種芝
故ニもつひ八十八人生かひ通義なる故今八十八とつけ
故ニ此所と御供所と云 今世俗畧て国吏有司拜糸ヲ其治平と庇び
万歳と唱ふ此時尊の后妃宍戸武媛男子と産給ふ是武殻王なり
び給ひて悪魚と平らげ給ふ功と武殻王の勲とし〻樂後ニ留め
地と守ら志ち給ふ故ニ国民樂留王と称ス

日本書紀曰日本武尊到吉備以渡穴海其處有悪神則殺之
同 二十八年春二月吉備穴濟神及難波柏濟神皆害心以放毒
氣令苦路人並為禍害之藪故悉殺其悪神并開水陸之径
天皇於是美日本武之功而異愛 下畧
此時彼悪魚ども退治し給ひ一物ふらんう又悪魚と云ふも書紀云
悪神の変ふらんう
因云北冥ニ魚あり其名を鯤とコヽロコスユスとふ安永年間ニ来り蛮人コレ
ーデレキシキンデラル と云る書紀。伺氏ニ語りるハ僕小海と漂泊せるとき
洋中ニ一の海あり凡圍三里計と見る四紅と岸ニ着て浜上ニ丸ル竹木
もなく河水もなし 扨紅中より獨金と取出せ〻吸と樊葉と煮て食ー
終り夫より又紅に乗り二三十里も走りて海中に大潮ありて来る 此

と思ひて人々怪み波浪きりくと廻りて水中へ沉むとなく船中の者驚くと
喫せざるハなし是傳へ聞北海の大魚三コヲコスニユスに成大魚の背なみ水面へ
浮ひ上り浪と化浮尼きめりとなん語りなりと又吾邦熊夷の海底まく
附と云雷の如き響きゆる附海上船とゝぶる夷ども周章漕逃上ると
いろ是おきうとゝ云大魚の海底を通る音うよ遂に其形とゝる者臣を先
ル三コヲコスニユスの類ひ多くゝ蛮人南海を通る附大なる浪とゝる船と留め漕
小登り行支九弐三里ばかり其後人家いとうふゝ云ふ水家いること
ハ附て大風吹おこり奥嶽鼻に撲こと頻りにしく漂来ばゝ屋くも吹ぎれば
者ども船路廣の榜んるとく熟視ばゝ浪ふいあゝ〳〵大魚の死〳〵
深ひにるまでゝ有る斯く其臭氣にうたてるこの本國へ送りく後大
幾と数〳〵命とおとゝ成ぬ此病歐羅巴洲中へ傳染を彼此

於瘟疫と傳へ〳〵終りなりと　以上藤島中良が紅毛雑話ニ云〳〵
然ばが就て奉〳〵往来と悩す悪魚尤ばゝ悪魚の疫癘の
説と思ひ合とに全く魚の霊にいひゝ〳〵蛮人の奥嶽にあるく瘟疫と成
ひ〳〵如く彼殺戮で〳〵悪魚の腐爛せ〳〵奥様那中ふ充滿〳〵諸人瘟
疫と病と終ふ国中にも傳染く疫癘の行き止〳〵ものなりん
水源藥師堂　前ゝらく如く八十八の水の傍ニ道ゆく〳〵五丁ばかり山ニのぼる世俗天皇の興院
傳云往古瀆留霊公の御建立ゆく堂塔魏くなる寺院なりば後年ニおよび廢
ニ弘法大師ゝに登りく求聞持の法と修〳〵加持〳〵給ふ此附石佛の業師の像と
作り給ひ水の上ニ安置〳〵給ふ我　小寺の支い前ニ云
如〳〵ニ畧と
此四り二反余の田圃あり堂守の傍のいく〳〵霊地ゆるゞ田ニ畏とのゝ〳〵と桜ふ
霊水自らこゝにのゝ〳〵旱そんなく何年も魏〳〵く凶作なく〳〵と實に天の化をけ給ふ所
神仏の加護とゝゝ〳〵山中ニ磐石あり大概白峯の石ニ類ゝ

崇徳天皇社
摩尼珠院

いくしまけん
華ちる
中ちる
桜の葉
牡蠣

金四ノ四十五

傳云

當社の例祭九月朔日ふる
事ハ王軒を八十八の水を始て浸し
奉り一日と云ふ云
又高屋村に天皇の社あり是ハ
九月十七日祭礼なり其来由ハ九月十七日
王軒を白峯に登し奉る高屋
より指中より御血ハ出しなり
其所に御宮を營み血の宮と号ス
又青海村の天皇の社ハ九月十九日
以て祭礼を行ふ是ハ白峯におゝ十九日に
茶毘し奉る烟のたなびくを
彼方に宮造し奉て烟の宮と号て右三所も其縁故
あり云

金山権現祠　水源薬師堂の傍に在り金山彦命を祭る金屎社権現の旧址と云

横鹽明神社　同山中にあり前に云ふ如く化現し八十八の水を宮内に注ぎ給ふ神

天皇社　山西の庄村に有り村中の生土神と世俗迷の通号と天皇とは此社なり

八十八の水より一丁余東なり

本社　一座　崇徳天皇　例祭　九月朔日　神輿渡御あり

拝殿　前に擂桜の両樹と左右に楚山

神輿舎　拝殿の左にあり　鐘楼　香炉の傍にあり

祭禮用所　香炉傍にあり

四脚の鳥居　通例の社の如く鉾に赤松あり　笠木横木彫刻あり

度會延佳神主云左右の柱は女柱男柱と云上の横木は笠木といふ第二の

横木を貫と云ふ此横木を法鳥けぐと掛まぐと云ふ笠木は有といひ

又延暦年中奏聞の凶官儀式此に不載御門とは今の香炉の支なり

とはなんぐ考べし

此社は第一上小覆ふい葺本とのひ其下に重りなる横木をとく鳥居とふまか

正中署扁東に向の其下又横木ありて左右の柱に接通せりこれを楫枕といく

左右の柱は女柱男柱といふれぞる居は蓋本の下の木の名をとりて地名とよび

金花山摩尼珠院妙成就寺　天皇の社の左の方にあり四国遍礼七十九番の札所なり

本尊　十一面観世音　立像長三尺三寸

大師堂　本坊の傍にあり弘法大師を安置

當寺は往昔弘法大師開基にて十一面観自在薄墨の霊像を安置し給ふ

金山権現を祭祀し奉り然るに長寛二年八月廿六日崇徳院崩御遷幸せ

し時金棺を此に置奉り國司ならび供奉の公卿京師へ帰る間玉葉

槙の木を給こんやとく金棺を此法水に浴し奉りぶ乾さようとて宮

紀り神霊を崇め奉るや

福江大師堂　福江村にあり大師十二支の彫像を安置例年二月廿日厄除の傳云往古

悪疫の孔しく南の方福江つくるに此本なるべし

惡氏山遍照院松浦寺 高屋村にあり此所は則ち白峯の麓にして八十番の前札所なり

本尊 弘法大師四十二歳之尊像 大師自作 世俗厄除の大師と云ふ

彌勒堂 大師堂左に並ぶ 弥勒菩薩を安ず 十王堂 大師堂の右に並ぶ 閻魔十王を安ず 右三堂とも南面なり

方丈客殿本坊庫裏 弥勒堂の左に列る

樓門 四天王を安ず南面

求聞持石 本堂の前にあり石垣を以て圍む九廻二丈五尺余の巨巖あり

當寺は人皇五十二代淳仁天皇弘仁六年 空海四十二歳の時在住し給ふ

時に當山鳴動して地中より一の大石穀出る其形宝塔のごとし 今佛塔となる

石是なり大師此岩上にいまして求聞持の法を行ひ給ひ

亦自ら尊容を作りて安置し給ふ是なり 今衆人厄除の大師孫

〻此石に向ひて年の悪を免れん事を祈る霊験あらたなり

白峯城 遍照院の境内なりとの説あり 貞治元年細川清氏官軍と偽り撰津河内

三十六騎討死之古址 林田村の片山の森なり清氏の良臣三十六騎ここに討死せり

細川相模守清氏討死之古趾 遍照院より西南二丁半許なり松山田と字す

康安元年十月足利義詮將軍の執事細川相模守清氏將軍と恨る

事あり南方に降る是なり南帝大將の印を清氏に授ふ去程に清

氏貞治元年秋七月四國を討平らげ今一度都を領け足利將軍と

七ばんと五ま余騎當國に渡り去歳震ふ此時清氏は白峯の麓に陣

をとるふ則ち遍照院の四面皆陣所なりとぞ 細川右馬頭頼之は備中に

在て此由を聞師を帥ひて讃州宇多津に着し城を築き中國は

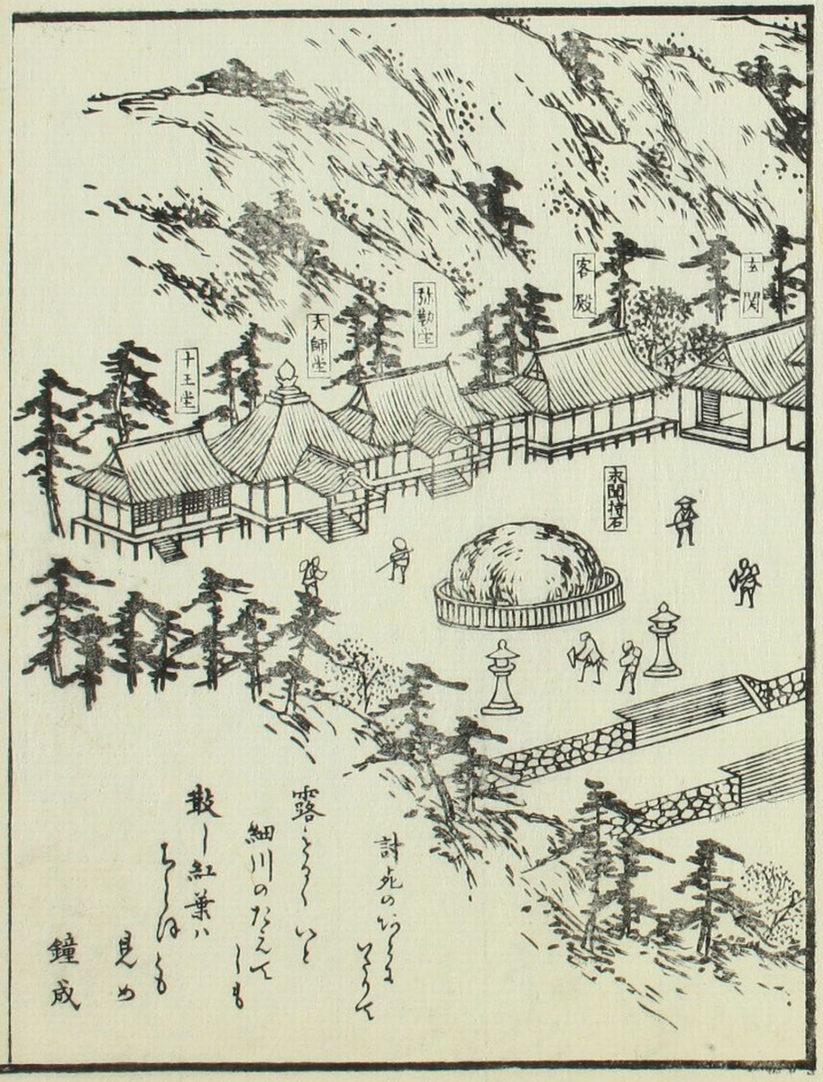
兵を率て対陣に清氏の勢に比べても頼之謀を以て清氏は

兵を欺く清氏怒て自ら力戦をなす數回に及て終に頼之に敗る

遍照院
求聞持石

貞治元年細川清氏ここに陣を是と
高屋の城とひ白峯の城ともてとどもれば此辺りハ
一圓の陣所ゆへ且清氏が討死の地も遠ゝ
彼芭蕉翁が高館と妻艸やつゝものの夢の跡と
よまれしもこゝと思ひ
出るとね

金四ノ四十八



露ゝ
細川のたゝえて
散し紅葉ハ
見め
鐘成

討死の

清氏の陣は白峯の麓より頼之の陣は鵜足津なれば其中間僅に二里なり互に隙を窺ふこと数日を送るなれども頼之の兵士は河波淡岐の通路を絶ち中国の兵士は備前国の住人飽浦雅守信胤といふ者官方になり海上を警固河波の小笠原美濃守といふ者清氏に同心して海路を塞ぎしかば宇足津の粮食殆尽しぬ兵衆日々に減少し清氏の兵威を恐れ諸国より加る者多し七月廿三日の朝頼之惟悦と出て新開遠江守を呼て言て曰当国両陣の騎を以て旁以日数を送れども不計の雑兵を以て中院源少将西長尾の城に入れり是を聞て指向て攻べき形勢なるべし其附我兵城を攻べき偽勢を以て向い城を取て兵粮を奪ふ事なり清氏城に寄せ〻頼之宇足津より出て搦手にむかひ必兵を出す敵を欺く清氏をくざる氣象の者あれば騎ふてもえせ出べし其比一巻一く大敵を破るべ〻新開遠江守に四国中国の兵五百余騎を消く指遣を路次の在家に大と放ちて西長尾の城に向ふ清氏これを聞て敵西長尾の城を陥し後廻らんと計るで中院殿を援べし其合戦左馬助従弟掃部助に千餘兵を消く西長尾の城に入しむ新開遠くの謀を聞て足軽少くして向て城下の在家を放火向ひ陣を立る夜を以て更れば向陣の兵粮を多く焼捨て亜道より白峯のふもと清氏の城に押寄る頼之兵を定めらるる如く廿四日辰の刻に搦手へ向い先陣二百余騎を二手に分て指向け鬨の声を挙げ清氏を攻る我一身の武勇を侵る仕るれば寄手の雑兵を一人も残さず悉く皆殺にせ具足を奪ひ取て拠を馬上にて

清氏討死

清氏が鋒を廻らして或は馬に乗て庇居を打居をと又曽の鉢助夜まぞも破付をと田圃ハ死骸の立とゝ

ぞう嗚呼惜しゝ清氏自身の武勇を侍て将ゝ道を失い兵卒を用いられざるもの猛将勇士の

うぶも運尽く討ゝと知人更なく續ゝく助る兵も其身ハ深田の泥まれ頸ハ敵の鋒をいりゝ只元暦のむと木曽義仲が栗津を

討と暦應二年の秋新田義貞の足羽の絶手にて討れしを異なゝ主将士卒各其職をる所の者なるぞ知べき事なり

頼之歴仕尊氏義詮屢有軍功細川清氏者一時之勇士也頼之在四国運聚策筏攻其城清氏戦死南海漸懐頼之恵消義詮之指麾也頼之来京師輔義満誘迄治道勧以武術明徳之役軍謀居多此後兵革寝息足利氏積累洽之福者頼之功業之所為也

上帯しめ唯一騎かけ出せば相徒ふ兵三十余人物具とも取とり固めて
頼之戦列を整へる兵一千余人の中へかけ入れば方に抵ち難き寄手一千余人
清氏が三十余人を破らんとく人馬ともに辟易す野木備前次郎楠原
孫四郎二人とは清氏馬の前輪に引つけ頸かき切て太刀の先に貫き指上て
唐士天竺の支へ先ぶ我秋津洲に於て清氏に勝る勇武の者やいる敵
も他家の者にあらば蓬さ師〻く笑るなと嘲りて只一騎当万の中に抵合る
飽まで馬強く打物の達者なれば北と逐て低落し其辛く廻る者人馬
ともに打倒る妻に備中の國の住人淵山三郎と備前國の住人伊賀掃
部助と武人田の中なる細道に辞くと引く中清氏追付て低んと諸澄と
合せて馳行と淵山が中間傍なる溝に下立て清氏が馬の草搦に突付て
その後なる立てくと成て動く清氏敵の馬を奪はんと太刀を逆

に持突て立りける備中の住人真壁孫四郎駆寄て一太刀ろく當倒さん
とする所に清氏走り来て真壁が馬に引落し中に指上げたり伊賀
掃部助高光馳合て敵と切て落し清氏に行逢んと東西に眼紙を
所に真壁が中に提げ其馬に乗んとする者ありて完駄〻と勇力なる凡夫かな
有べきに頼の所の者ひと畠を乗違て馬を駆て清氏と組清氏を懸て抱指て掃部
助と射向の袖の下に刺やく頸とかんとて掃部が心早き者ども組て均〻く
清氏が寝の草搦とて上げ三刀さして刺たく弱る所を押へ〻〻頸を取る
さても名高き勇猛の將なれども一人の武勇を支へ〻〻続く身方もなく衆
治郎左衛門尉と玲床孫七郎と弟人の外に所同弘の者もなく〻〻去く

閻伽井　遍照院東南三丁許にあり大師在世の時
弘法大師加持水とりく　弥陀之橋　同三丁許正南にあり大師在世の時
弥陀佛教向あり　平〻
底無川　寺より三丁許東へ傳云大師水を乞給ひしに大師杖を突給ひしに水ぬけ出て一流もなりけり〻〻

五夜が山嶽 遍照院の正向の山より此に岩嵐迄大師この所にて五夜のわざ修行しむ
ひ〜あ〜号く〜又大永の比自然居士とゝへる道人来りて此嵐に住侍りとなり
雲井御所旧趾 林田村庵氏の宅地に俚あり此家わか在廰野太夫高遠の後孫に
保元元年八月三日崇徳院讃岐國松山の津小着せ給ひ〜〜国司忠ど
御所を造り出さでとゝまれば在廰野太夫高遠の作り松山の御堂に入奉り
せたるに則ち此堂に在廰の摺寺なり此所に三年一年〜後敷が岡に移り
せ給ふ此御堂に〜〜泉ませ給ふ御製に
あ〜もまさしらぬ雲井となりぬる空行月の影にまもる
これに後〜雲井の御所とひ又林田の御所とも稱文善旧趾の碑
拾遺の編に委〜〜出ス

金毘羅叢書名所圖會巻之四終